
道に迷ったその先で・・・

紅雨 霽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道に迷ったその先で・・・

【Nコード】

N 6 4 1 4 C

【作者名】

紅雨 霽月

【あらすじ】

僕は道に迷い、廃校へとついた。そこで、途方に暮れているところから声が聞こえてきて、上から、一人の少女が現れた。それが、僕たちの出会いだった。そんな、オカルト(?)恋愛小説。

プロローグ（前書き）

前の作品からおよそ三か月ぶりの作品です。

不慮の事故などがなければ、一日一話更新で22話＋プロローグ＋エピローグで24日で完結する予定です。

これ以上は…特にいうこともありませんので本編をお楽しみください。

ブローグ

使われなくなつて久しいと思われる廃校舎。それは、今では珍しい木造建築の校舎だ。

僕はその校舎の中の教室の中にいる。

ゆっくりと、壁の方へと近づきそこに触れてみる。

冷たくはなかった。太陽に当たつていて暖かいという直接的なものもあつたが、感情的な温かさも感じた。なんだか不思議な感じだ。これが木の持つ独特の温かみ、というものなんだと思う。

僕もどうせ通うならこういう学校がよかったな。そう思いながら、小さく笑みを浮かべてみた。

まあ、こんなことはどうでもいいとして、現実から逃げるのはここまでにしよう。

実は、僕は道に迷つた結果ここに来てしまったのだ。

この辺りには引越してきたばかりなので知らない場所がまだたくさんある。そういう場所を減らそうと夏休みである今を使っているところをまわってみようと思ったのだ。

で、そのときに山へ入る道を見つけてそこへ、ふらふらと入ってみればこのありさまだった。

高校生にもなつて迷子になつてしまふとは思わなかった。

けど、大人の人でも山に入つて道に迷う人はいるからおかしいことではないのかもしれない。

……つて、そんな楽観的に分析しても意味がない。それをしたところで帰り道がわかるわけじゃないんだから。

とりあえず、僕はポケットから携帯電話を取り出した。

とてもシンプルなデザインの携帯電話だ。使う回数は一か月に一回から二回ほどだ。

この携帯電話に登録されている電話番号は家の電話の番号と一人の友達の携帯電話の番号だけだ。

今はそんなことどうでもいい。とりあえず、最初は家に電話をかけてみよう、と思った。

登録されている電話番号の中から自分の家の番号を選ぶ。それから、携帯電話を耳に当てる。

『ただ今おかけになりました電話番号は電波の届かないところにいるか——』

あれ？そう思って嫌な予感に駆られながらも自分の携帯電話を確認する。

アンテナのマークが一本も立っておらずここが圏外だということを示していた。

これで、携帯電話で人を呼ぶ、ということができなくなってしまった。

かといって自分一人で勝手に歩いて元の場所に戻る、ということはお出来そうにない。というか、それができたら最初からやっているここはだいぶ昔に廃校になったようでどこの道とも繋がっていないかった。こういうことかって言う道じゃない場所を通らないといけないってことだ。さらに言う僕は道じゃない場所に入ってしまったことが迷った原因でもある。

道に迷ったのは明らかに僕自身のせいなのだ。

ちよつと、道の横の方が気になったので好奇心に身を委ねて入っていた。そうだ、僕が悪いんじゃない。僕の好奇心が悪いんだ……。

「はあ……」

ため息をついた。今はそんなことどうでもよすぎる。というか、僕は誰に対して言い訳をしているんだろうか。

どうしよう。本当にどうしよう。好奇心に身を委ねた結果、山の中で道に迷いそのまま死んでしまう、というのは情けなさ過ぎる。

ここから出て決死の覚悟で山に入るべきなのかもしれない。それを実行に移せないなら誰かがここを発見するまでここで待ち続けるか、だ。

前者の方が助かる確率が高いような気がする。もし誰かが僕を探していてもここを見つけることはほとんどないように思うからだ。

「はあ……」

また、ため息をついてしまう。自分のせいとはいえ悪いことだけを天秤に掛けるのは嫌だった。

けど、もう山の中に戻っていく、ということは決めてしまった。だから、もうここに用はない。そう思っ僕はこの部屋から出ようとした。その直後、

「ねえ……」

微かに女の子の声が聞こえてきた。こんな場所に人がいるはずない、と驚いた僕はその場で立ち止まってしまう。

それから僕は部屋の中を見回して、廊下を見てみた。だけど、誰もいなかった。

さっきのはなんだったんだろう。どうしても助けがほしい、と思った僕の空耳かな？、と首を傾げて再度この場を立ち去ろうとした。「ねえ」

また、女の子が呼ぶ声が聞こえてきた。今度は先ほどよりもはっきりしている。

やっぱり空耳じゃないみたいだ。そう思っ僕がまた周囲を見回してみんだけどやっぱり誰もいない。

さっきのは空耳なんかじゃなかったのに。きよるきよる、周りを見回し続ける。

「そこじゃないよ。ここだよっ！」

怒ったような女の子の声が聞こえてその声の主であろう女の子が僕の前に現れた。割と、衝撃的な場所から。

具体的に言うとお上からその女の子は現れた。

驚いて声も出せなくなった僕はその子をじっと見つめる。

「なんで上にいるわたしのことを見つけれないかな？」

何故かその子は僕がすぐに見つけられなかったことに怒り、僕のことを軽くではあるけど睨みつけてきている。

「いや、えつと、そんな所にいられて見つけるのは、無理だと思うんだけど」

半分くらいは反射的、といった感じで僕は言う。

「あなたの意見はどうでもいいよ。わたしが見つけてほしかったんだからあなたはそれだけをすればいいんだよ」

わがままな子だった。でも、とりあえず一応話は通じるんだな、と思ったことで少し落ち着いた。

少しその女の子の姿を観察してみる。

依然として僕のことを軽く睨みつけている瞳は少し茶色のかかった黒色だ。意思の強そうな光が込められている。顔は僕よりも幼く、一三、四歳くらいのように見える。亜麻色の髪の毛は肩にかかるかからないかの所で切られている。

それから、今度は彼女の服装を見る。一言で言い表すならボーイッシュな格好だった。とても運動がしやすいそうだ。たぶん、彼女は動くことが好きなのだろう。それを裏付けるかのように彼女はスニーカーを履いていた。

けど、そんなことはわりとどうでもよかった。何故なら、彼女の足が地面から浮いていたからだ。

「あれ？……ええっ！」

あまりにもありえないものを見てしまったので驚くまでに時間がかかってしまった。

てつきり彼女は天井に張り付いていたりしたのだと思っていた。

それもそれでありえないけど、そっちのほうが現実味があった。

「ねえ、じろじろ見てたと思ってたらいきなり大声出して……。もしかして、あなたって変態さん？」

睨むような表情から一転して今度は冷めた瞳でこちらを見ってくる。「いや、そんなんじゃないよ。……ただ、上から現われてくるような子ってどんな子なのかな、って思って見てただけだよ」

「ふーん？」

信じてないみたいだった。まあ、こんなこと弁解しなくてもいい

か。

僕にとってはこの子の体が浮いているってことの方が重要だ。

「それよりも、さ。なんで君の体は浮いてるの？」

少し緊張しながら僕は聞く。それに対する答えはどんなものであれきつと僕の中の常識では当てはまらないものだろうから。

「……」

一瞬、悲しげな表情を浮かべる。けど、すぐにその表情を引っ込め笑顔を浮かべる。

「あなたは何でわたしが浮かんでると思うの？」

女の子は僕と目線の高さを合わせるようにふわり、と今よりも少し高い位置に浮かぶ。

「それがわかんないから僕は聞いているんだけど」

「なんでもかんでも聞けばいいってものじゃないよ。ちゃんと自分で頭を使って考えることもしないと」

そう言いながら彼女は僕のおでこを一度だけ指でつついた。

「……わかった。じゃあ、自分で考えてみるよ」

僕は彼女につつかれたおでこを指でさすりながら答える。別に痛かった、というわけではない。ただ、女の子にこんなことをされたのが初めてなので少し不思議な感覚が残っている。

「そうそう、それでいいんだよ」

彼女は僕の気持ちに気付いた様子はなく何故だか楽しそうに笑っていた。

表情豊かな子だな、と思って僕は彼女の顔を眺めていた。まだ少し話しをしたんだけどその間に怒った顔、睨んでくる顔、冷たい瞳を向ける顔、楽しそうな顔、そして、悲しそうな顔とその直後の笑った顔。

「なんでわたしの顔をじろじろと見てるの？」

訝しげに僕の方を見てくる。

「いや、あの……」

正直に君が表情豊かな子だな、って思ってた、って言ったらあん

まりいいことは言われそうにないような気がした。

なんで別のことを考えてるの、と言われるか、やっぱり変態なんだ、と言われるかのどちらかだと思う。

だから、

「君の顔を見てたら、君が浮かんでる理由がわかるかな、って思ったんだ」

と、言っておいた。

「ほんとう？実は、全然関係なことを考えてたんじゃないの？」

ただ、わがままなだけな子かと思ってたけど感も鋭いようだ。このままだとまた、変なことを言われかねない。

彼女が口を開きかけた。僕はそこへ割って入るように少女の質問に対する答えを口にする。

「君は、超能力者だったりするんでしょ？だから、君は浮かぶことができるんだ」

彼女の言葉を遮るように発した言葉だったから少し早口になる。

それに、実は彼女が超能力者だとは微塵も思っていない。

本当は別の存在だと思っている。だけど、それは言葉にすることをばかれるような存在だ。

「ぶ」。残念でした。わたしは超能力者なんかじゃないよ」

子供っぽい口調でそう言って今度は右手の人差し指で僕の鼻の先に触れる。そんな彼女の仕草に僕はどきり、としてしまう。

「わたしはね、幽霊、なんだよ。……この世界に残るべきじゃないのに残ってしまった。そんな存在なんだ」

とても、悲しげな微笑みを浮かべる。たぶん、僕から悲しい表情を隠そうとしていたんだと思う。だけど、それを隠しきれなかったから見ている人にとって痛々しさを感じる微笑みとなってしまった。このとき、僕はこの子に何かをしてあげたい、と思った。だけど、何をすればいいのかわからない。しかも、それ以前にこの子が何かをしてほしいと思っているのかもわからない。

だから、だからこそ、彼女の名前を呼んであげよう、と思った。

だけど、僕は彼女の名前を知らない。まだ、僕たちは自己紹介さえしていないかった。

「……そういえば、君の名前は？」

流れからして不自然な問いだとは思った。だけど、聞かずにはいられなかった。彼女の名前を知ることによって彼女の悲しみを少し、和らげてあげられるような気がしたから。

だけど、そんなのは単なる建前でしかない。ただ、僕はこの雰囲気気に耐えられなくなったただけだ。そう、僕はこの雰囲気から逃げてしまいたいだけだった。

「……？」

彼女がきよとん、とした表情を浮かべる。悲しげな微笑みは完全にその姿を潜めた。でも、結局は潜めただけだ、また、いつ外に出てくるかわからない。

「君の、名前だよ。……名前、ないわけじゃないよね？」

きよとん、とした彼女に理解させるように少しゆっくりとした口調で言った。

「わたしの、名前？」

確認を取るように聞いてきた。なので、僕は頷き返しておく。

「わたしの、名前は……優希^{ゆき}、だったと、思う」

なんだか曖昧だった。もしかしたら、幽霊になってから長いかもしれない。そして、その間、誰とも話をする事がなかったからその間に名前を忘れそうになってしまったんだと思う。本当にそうなのかはわからないけど、わざわざ聞くことでもない。

「優希ちゃん、でいいんだね」

こぼれ落ちかけている記憶という水をすくい取って入れ物の中へと戻してあげるように僕は聞いた。

「うん、そうだよ。わたしの名前は、優希だよ」

満足そうに頷いて嬉しそうな笑みを浮かべた。

「そ、優希ちゃんか。よろしくね」

今度は確認のためではない。彼女の名前を僕の中に刻み込むため

に彼女の名前を口にした。

「うん、よろしく。……って、まだあなたの名前を聞いてないよ。自分だけ相手の名前を聞くななんてナンパでもしてるつもり？」

非難がましくそんなことを言われた。て、いうか、優希ちゃん、一言多いよ。

そんなことを思っても本当に思うだけにして、口には出さないでおく。

「あ、うん、ごめん。……えっと、僕は深山^{みやま ひろや}広也^{ひろや}っていうんだ」

「広也、だね。よろしく」

いきなり、名前の方で、しかも呼び捨てで呼ばれた。まあ、でもいつか。名字で呼ばれるよりも名前や呼び捨てで呼ばれる方がこっちも気楽だ。

「うん、改めてよろしくね、優希ちゃん」

僕は右手を優希ちゃんの方へと差し出した。優希ちゃんはそれを少しの間見つめてから同じように右手を差し出してきた。

僕はその手を握る。優希ちゃんも握り返してくれた。

彼女が幽霊だとは信じられないほど普通の人間の感触だった。

「そういえば、広也はなにをするためにこんなところに来たの？」

手を放した途端にそんなことを聞かれた。少しだけ首を傾げている。

その言葉に僕はうつ、と言葉を詰まらせてしまう。

「もしかしてえ、迷子なの？」

からかうような口調で聞いてくる。しかもわざわざ横を向いて流し目でこちらのことを向いてくる。そして、口元に手をあてて笑いを隠しているような、表情を作り出す。

たぶん、優希ちゃんは僕が迷子だったことをほぼ確信しているんだと思う。

「えっと、まあ、そうだよ。僕は道に迷っちゃたんだよ」

嘘をついてもすぐばれるんだろうな、と思って素直に認めておくことにした。

「ふうん、そうなんだ。でもさ、なんで迷っちゃったのかな？」

いまだに僕のことを流し目で見たまま今度はなにか楽しいことを探すかのような口調になってる。たぶん、僕をからかう材料を探してるんだと思う。

「普通に山道を歩いててここに来たわけじゃないよね？ここ、山道から外れたところにあるからさ普通に歩いて迷子になっただくらいじゃ来れないよね？」

「あゝ、えっと、それは、その」

言葉に詰まってしまってから自ら墓穴を掘ってしまったことに気がついた。

「どうしたの？なんで言葉に詰まってるの？」

優希ちゃんはやにやとした笑みを浮かべてる。優希ちゃんに僕が掘った穴の中に正面から押されて落とされるようなイメージが頭の中によぎった。

「ねえねえ、ちゃんと教えてよ。どうやって道に迷ってここに来たのかってことをさ」

正面からじっと、僕のことを見てくる。少し気迫があつて、僕は少し後ずさってしまう。

「いや、実は、ね」

「実は？」

「……好奇心に身を委ねて山道から離れたら、その、こういう風に迷っちゃったんだ」

結局、正直に言ってしまった。

優希ちゃんは呆然としているようだ。と、そう思ってたら、

「あはははは、そ、それって相当馬バカだよ？好奇心で山に入って遭難するなんて普通、あえりえないよ」

爆笑しながらそんなことを言う。

「そこまで笑わなくていいのに……」

「だ、だって可笑しいだもん。こんなバカな人初めてみたよ！」

尚も優希ちゃんはげらげらと大きな声で笑っている。

なんだか僕は恥ずかしくなつて優希ちゃんから少し顔を逸らした。そうしたら、窓から陽の光が入ってきていることに気がついた。なんとなくだけど、その陽の光にさえ僕のことを笑っているような気がした。目の前で明るく笑っている優希ちゃんのように。

一話

「はあ、可笑しかった。ねえ、いつかまた広也のバカな話、聞かせてね」

笑いすぎて浮かんだ目元の涙を指で拭いながら優希ちゃんはからかうようにそう言う。

「そんな話、もうないよ」

僕の口調はつい、いじけたような口調になってしまう。優希ちゃんに僕の失態を笑われ続けたせいでもととあんまりないけどプライドなんかが傷つけられた。

「広也、わたしのこと笑わせてくれたお礼に山の出口まで連れていってあげるよ」

なんだか、お礼をされる理由が嫌だった。かといってここで文句を言ったら案内してくれなくなるかもしれない。

なので、仕方なく素直に頷いておく。

「……うん、それじゃあ、よろしく」

「うん、任せて。わたし、この辺りのことは詳しいから」

自信ありげに自分の胸を叩きながらそう言う。本当にこの辺りのことに自信があるようだ。これなら、僕は問題なく家に帰ることができるだろう。

「さ、それじゃあ、広也、先に歩いてみて」

「なんで？」

連れて行ってくれる、って言っているのに、これでは意味がないんじゃないだろうか。

「大丈夫、広也が道を間違えたらちゃんと言ってあげるから。特に深く考えずにわたしの前を歩いてみてよ」

優希ちゃんは僕の後ろの方に来る。

何を考えてるんだろう。でも、案内してくれるならそこまで気にする必要ないか。

僕はそう思って一步踏み出して廊下に出た。それから、左右を見てからそのまま立ち止まる。

「広也、どうしたの？」

不思議そうな声が後ろから聞こえてくる。その声に反応して僕は優希ちゃんの方へと振り返る。

「……えつと、出口、ってどっちだったっけ？」

もうどうしようもない、という苦笑を浮かべながら僕は言った。勘に頼って進んでみるのもよかったけど、道を間違っていた時、優希ちゃんにんと言われるのかわからない。だから、もう、先に言ってしまうおう、ということにした。

「え？もう迷っちゃったの？」

ここまで言ってしまったら何を言っても取り消すことができないので僕は無言で頷いた。

「ねえ、方向音痴？広也、って方向音痴なの？」

明らかに僕が方向音痴だ、っていうのをだしにして楽しもうとしている。

「そんなことないよ。ただ確認しただけだよ」

少しむっ、としてしまった僕は右の方へと足を進める。当然、適当に選んだ方向だ。

「ほんとう？」

「ほんとうだよ」

「じゃあ、なんでそっちに進んでるの？出口はあっちの方にあるよ」
そう言って優希ちゃんが指差したのは僕が進んでいるのとは逆の方向だった。

「え？そうなの？」

思わず立ち止まって優希ちゃんの方に顔を向けてしまう。

「うん、そうだよ。わたしは嘘は嫌いだから嘘なんて言わないよ」

確かに、そうなんだと思う。黙ったり、ごまかしたりして何も言わないことはあったけど、嘘は言っていなかった。

だから、優希ちゃんが言っていることは本当のことなんだと思う。

そして、それが意味することは、

「広也、自分でおっきい墓穴を掘っちゃたね。素直に方向音痴だ、
って認めればよかったのにね」

つまりはそう言うことだった。

僕は自分の恥ずかしい部分を知られたくなくて行動したのにそれ
がかえってあだとなり余計に恥ずかしい思いをすることになってし
まった。

「あはは、広也、ってほんとうにバカなんだね」

優希ちゃんはまだ大声で笑い始めた。

「あー、もう。わかったから、早く行こう」

これ以上笑われているのが嫌だったから少し大きめの声でそう言
う。そして、優希ちゃんの脇を通り抜けて正しい道へと進んでいく。
「あ、待ってよ、広也！わたしがいないと帰れないんだからさっさ
と行ったらだめだよ！」

優希ちゃんが急いで僕の隣へと来る。

並んだまま、歩みを進める。優希ちゃんは幽霊だから足音は全然
聞こえてこない。僕の足音だけが静かな廊下に響いている。

なんにも喋らないのかな、と思って僕は優希ちゃんの方を見てみ
る。出会ったから間もないけどこの子が黙っている、というのはあ
まり似合わないような気がした。

「なにかな？わたしのこと、じろじろ見て」

「何か話してくれないかな、と思っただけ。なんか、優希ちゃんが黙
ってるのって似合わないからさ」

「それって、どういうこと？」

移動をしながら体全体をこちらに向ける、という幽霊ならではの
芸当をしてみせてくれた。

「どういうこと、って言われても。なんとなくそう思っただけだし
……。まあ、しいて言うなら明るい性格の子、だって思ってるって
ことかな？」

質問に答えているはずなのに、疑問形になってしまう。これじゃ

あ、質問に答えたことになってないよね、と思ったけど今さら言いなおしても意味がない。

そんなふうに少しでもいいことで頭を悩ませていると、

「ほんとうにそう見えてるの？」

そんなふうに納得がいかない、という風に聞かれた。

「うん、本当にそう見えるけど。どうかしたの？」

「ほんとうに些細なことなんだけどね。生前のわたしはもっと顔見知りしてて自分の言いたいことを言えてなかったような気がするんだ」

優希ちゃんはそう言っているけど、とてもそうだったとは思えない。初対面の僕に向かってバカ、とか言いながら笑える人が顔見知りだと思えるはずがない。

だけど、僕はそういうことは言わずに優希ちゃんが先を続けるのを無言で待つ。

「たぶん、それは誰かと久しぶりに話をするからだと思うんだよね。幽霊になってから誰にも会ってないから、一年ぶり、ってことになるのかな？」

腕を組んで首をかしげている。いつから、ここにいたのか、とかを思い出しているのかもしれない。

「え？誰にも会ってないって、ずっとここから離れたことないの？」疑問に思ったから聞いてみた。外に出てなかったら外まで案内できないんじゃないだろうか、という不安もあった。だけど、それ以上にこんなところに一人きりでいて平気なんだろうか、という思いの方が強かった。

「別に、そう言う訳じゃないよ。山道のあるところまで行ったことがあるよ。だから、安心してよ。ちゃんと広也を帰らせてあげるからさ」

優希ちゃんは前者の方だと思ったようだ。僕の方を向いて安心させるように浮かべた笑顔に不自然さはなかったから何かを隠した、っていうわけでもなさそうだ。

「そうなんだ。それじゃあ、今から僕と街の方まで行ってみようか？」

遠まわしに優希ちゃんがこの辺りから離れたことのない理由を聞いてみようとそんなことを提案した。離れられないなら、その理由を話してくれるような気がしたから。

「行ってみたい。けど、わたしはここを離れられないんだ……」

「え、それって——」

「うっん、そう言うことじゃないよ」

途中で遮られてしまった。

「なんだかこの場所が無性に気になって離れられないんだ。ずっとここにいるのに何にも見つけられてないんだけどね」

優希ちゃんがそう言ったときに丁度、校舎の中から外へと出た。

僕は陽の光が眩しくて目を閉じてしまったからその時の優希ちゃんの表情を見ることは出来なかった。

僕が再度目を開けた時に優希ちゃんは僕の顔を指さして笑っていた。

「広也、さっきの顔、面白かったよ」

どうやら、眩しくて目を瞑った僕の顔がおもしろかったみたいだ。そんなことで笑わなくてもいいのに、と思うけど優希ちゃん的笑顔を見てたらその程度のことどうでもよくなった。

そんなことよりも、僕は優希ちゃんのここから離れられない、という言葉を聞いて言いたいことができた。

校舎の中から出て目を閉じたときに優希ちゃんの表情を見ていなくてよかったと思う。優希ちゃんが浮かべていた表情によつては言いにくなつてたことだろうから。

でも、言うのは今じゃない。優希ちゃんが僕と別れようとするその時に言うべきことだ。

「優希ちゃん、笑ってないで早く案内してよ」

「ん、もうちょっと笑ってから？」

そんなことを言っているけれど、すでに笑ってはいなかった。た

だ、楽しんでいる、という雰囲気はとれた。

「もう、笑ってないんだからいいでしょ？」

「そんなことないよ。あはは、広也、ってバカだね」

僕を指さしながらわざとらしく笑い声をあげる。

「はあ……。もう、好きなだけ笑っていいよ」

対して僕はため息をつくことしかできなかった。

「広也。なんか、反応が冷たいよ。そういう冷たい反応をする男の人はすぐに嫌われちゃうんだよ」

「冷たいっていうか、僕は当然の反応を返したまだけだと思うんだけど。悪口を言われていい反応を返す人なんているはずないと思うし」

「……おもしろくないなあ。ここでもっとおもしろい反応を返してよ」

「僕にそんなことを期待されても困るんだけど」

また、ため息をついてしまう。優希ちゃんといるとなんだか疲れる。たぶん、この子のわがままに付き合っているせいだと思う。

かといって、優希ちゃんのわがままを抑えて今すぐ案内をさせる、ということをして今の僕には出来ない。

僕に話術はないし、まだまだ優希ちゃんのことには知らないことが多いからだ。

「それよりも、早く案内してよ」

でも、とりあえず、これだけは言うておく。僕が何も言わないでこの状態が前に進むとは到底思えないからだ。

「しょうがないなあ。案内してあげるよ。広也、遅れないようにしつかりついてくるんだよ」

言って、優希ちゃんは道と呼べるものが何一つない森の中へと向かっていった。僕は優希ちゃんに言われたとおり、遅れないようにその後ろ姿を追いかけた。

二話

二十分ほど歩いてようやく道のあるところまで戻ってこれた。結構、山の奥の方まで来ていたようだ。

まあ、ここからなら、僕一人でも帰れそうだな。

「ありがとう、優希ちゃん。やっと僕一人でも帰れそうところでこれたよ」

「どういたしまして。でも、本当に一人で帰れるの？ 廃校では出口までの道を間違えそうになってたよね？」

わざわざそんなことを言っただけじゃないと思う。でも、後半のこととは事実だから強く言い返すこともできない。それに、それを言われたら少し自信がなくなってしまう。

だから、

「大丈夫だよ。……たぶん」

なんとも自信のない答えとなってしまった。

「なんでそんなに自信がなさそうなの？ なんかこのまま広也を置いて戻るのも心配だなあ。……でも、送ってあげようにも街の方までの道はわかんないしなあ」

年下の女の子に心配されてしまった。しかも、割と本気で。

「しょうがない、広也が人のいるところに戻れるまでついていってあげるよ。このまま別れて広也が道に迷って死んじゃったら嫌だし」
「さうり、と不吉なことを言ってくれた。」

でも、優希ちゃんがついてきてくれる、というのは好都合だった。人のいる所に行った方が僕の言いたいことは言いやすくなるだろう。僕の言いたいことはただ単に言えばいいだけじゃない。提案みたいなものだから優希ちゃんにそれを否定されてしまえば意味がない。

「いや、迷うことなんてないと思うけど。……でも、ついてきてくれるって言うならついてきてほしいな」

これから先のことを考えてそう言った。だけど、本当は一度道に

迷ってしまったて一人で山を歩くのが少し怖かった。

「……」

なぜか優希ちゃんには僕の顔をじつ、と見ている。なんとなく嫌な予感がして一歩だけ後ずさってしまふ。

「広也は道に迷うことはないって思ってるけど、実は一人で山を歩くのが怖いと思ってるんだね」

鋭く、そんなことを言い当てられてしまふ。やっぱり優希ちゃんには勘が鋭いみたいだ。それとも、幽霊になってしまふとみんな勘が鋭くなるんだろうか。

十六年間生きてきた中で幽霊に会ったのはこれが初めてなので憶測の域からは離れられない。けど、これから幽霊に会うことがあり、僕の考えが正しいければこんなふうに苦労してしまふんだろうか。

でも、よく考えてみればこうやって苦労するのは優希ちゃんのわがままで人をからかうのが好きな性格のせいだよね。だったら、別の幽霊に会ってもここまで苦労することはないか。

「広也、どうして黙ってるの？あ、もしかして、図星、だったの？」手で口元を隠しながら言っている。たぶん、それはからかっている、ということを表に出すためのサインなんだと思う。

「まあ、ちよつとだけ、ね」

素直に僕はそう答えた。優希ちゃんは嘘を言うのが嫌いだと言っただけ僕は嘘をつくのが苦手だ。

しかも、優希ちゃんは勘が鋭いからもし、僕が嘘をつくのがうまくてもすぐにばれてしまふんだと思う。だったら、優希ちゃんが嫌いで、僕が苦手な嘘をつく必要なんてない。

僕にプライドがない、というわけではないけど、嘘がばれてしまった方がプライドは傷ついてしまうと思う。

「広也って意外と怖がりなんだね」

「意外と、って……。僕はまだ死にたくないし、僕から自分一人で帰れる自信を奪ったのは優希ちゃんなんだけど？」

「わたしのあの程度の言葉で自信をなくすなんてもとから自信がな

かったのと同じだよ。むしろ、広也はわたしを非難するんじゃないで感謝してよ。わたしがなにも言わなかったら広也は自信過剰で自滅してたかもしれないんだよ」

それから、「えっへん、わたしってえらいでしょ」、「と言って胸を張る。

「あれくらいのことで自信過剰だとは思えないんだけど」

「あまいよっ!」

優希ちゃんが僕の言葉に反応して顔に向かって指をさしてきた。

優希ちゃんの指と僕の鼻との距離は数センチしかなかった。

「自信過剰な人は決まってそう言うんだからね。そして、運がない人はそのまま散っていつちゃうんだよ!」

「そ、そうなんだ」

優希ちゃんの勢い押されてつい、そんなことを言ってしまう。いやいや、ここは認めちゃ駄目なところなんじゃないだろうか、と思ったけど今さら何かを言ったところで効果はなさそうだ。

「そうなんだよ。だから、広也は自信過剰な広也を止めてあげたわたしを褒めるべきなんだよ」

僕から少し距離をとり、腕を組んで数回頷く。それに対して僕は何かを言おうと思うけど、完璧に優希ちゃんのペースに飲まれてしまっている。僕のどんな意見を言っても優希ちゃんには聞いてもらえないような気がする。しかも、何かの意見を言う、という気力が削られていた。

「はあ……。ありがと、優希ちゃん」

ため息の後、僕はそれしか言う事が出来なかった。女の子に口で負けてる自分が情けない。

「そうそう、そうやって素直に感謝してればいいんだよ」

優希ちゃんは笑顔を浮かべた。半ば無理やりとはいえ、僕に感謝されるのが嬉しいんだろうか。それとも、僕を口で打ち負かしたことが嬉しいんだろうか。

前者だったら、まあ、納得できる。だけど、もし、後者だって言

うならなんともやりきれない気持ちになってしまっただろう。

……あんまり、後ろ向きには考えたくないから、優希ちゃんの浮かべた笑顔は前者だと受け取っておこう。

「よし、広也、早く行こう」

そう言って、意気揚々と、山道を下っていく。僕はその後ろ姿にため息を抑えながらついていった。

山道を下り始めてから十分ほどで車道のあるところまで戻ってこれた。

ここに来るまでに分かれ道は一つもなかった。だから、わざわざ横の道にそれるようなことをしなければ普通は道に迷わないはずだ。そのわざわざ横の道へと進んだ僕が言うのもなんだけど。

「ここまで来れば広也でも一人でちゃんと帰れるよね」

僕の前進んでいた優希ちゃんがこちらを向く。
「流石にね。こんなところで道に迷ったら、僕は家から出られないよ」

優希ちゃんのからかいと皮肉のこもった言葉は深く受け止めないことにした。あんまり深く受け止めると話が進まなくなる。

「それもそうだね。……じゃあ、わたしはここで戻るね」

「あ、優希ちゃん、ちょっと待って」

山の中へと、正確には廃校へと戻ろうとした優希ちゃんを僕は呼びとめる。

「ん、なに？」

ぴたり、と宙で体を止め、僕の方に振り返る。

「優希ちゃんが良かったら、一緒に街の中をまわってみない？僕この辺りに来たばかりで、知らない場所が多いんだよね。……ていうか、優希ちゃんってこの辺りのこと、知ってるの？」

こことは全然別の場所で死んでここにいるっていうのは変な気がする。だけど、僕は幽霊について何一つ知らないからそういうこと

があっても変じゃないのかもしれない。

「……ううん、この辺りで知ってるのはあの廃校の周りだけだよ」
少し考え込んだと思ったら首を左右に振って答えてくれた。

本当に、全然別の場所で死んで幽霊になることってあるんだ。でも、なんでそんなことがあるんだろうか。

いや、今考えることじゃないか。ここで僕が黙っていても不自然だし。

「それじゃあ、一緒にこの街をまわってみようよ」
「……」

優希ちゃんは何も答えてくれなかった。

「嫌なら嫌だって、気にせず言っていーいよ」

「別に、嫌だっていう訳じゃないよ。……ただ、離れられないんだ。あの廃校がすごく気になって」

「そう言ってる割にはこうして、結構廃校から離れてる場所まで来てるよね」

「それは、広也のことが心配だったからだよ。知り合いが死ぬのなんて嫌だから、ね」

その言葉で僕は優希ちゃんは優しい子なんだ、ということがわかった。さんざん僕をからかったりしていたけど、知り合ったばかりなのにわざわざ自分から僕についてきてくれた。

そして、怖がりでもあるんだということもわかった。あの程度で僕が死ぬと思っている。それは一度死んでしまった優希ちゃんだからこそそう思うのかもしれない。反対に僕はほんの少しだってそう思うことはない。

これらのことが関係あるのかはわからないけど、僕は優希ちゃんをあの場所に戻らせたくないと思った。一人で寂しくあんな所にいたら嫌なことを思い出してしまうんじゃないだろうか、そう思ったから。

「わたしはこれ以上あの場所から離れられないよ。ずっとあの場所にいたら何かが起きるような気がするんだ。だから、それまであの

場所で待っていたいよ」

優希ちゃんはどうしてもあの廃校へと戻りたいみたいだ。何か、があるかもしれないあの場所へと。

でも、僕はこのまま優希ちゃんが戻ったとして何かを見つけれ
るとも、何かが起こると思わなかった。優希ちゃんはある場所に
一年近くいた、と言っていた。

あの小さな空間で一年近く何も見つからず、何も起こらなかった
のだ。たぶん、優希ちゃんの何かが変わらなければいけないのだと
思う。

できれば、僕が優希ちゃんの変わるためのきっかけを見つけてあ
げたいと思った。優希ちゃんが時折浮かべる、悲しげな表情が僕に
そう思わせたんだと思う。

「一回あそこから離れてみたら、何か新しいことに気がついたりす
るんじゃないかな？ 探し物って諦めたり、一回探してもう一回探し
始めたときに見つかることって結構あるからさ」

優希ちゃんに廃校から一時的に離れてもいいかな、と思わせるた
めに僕はそう言った。

「……でも」

戸惑うような、迷うような声。

「大丈夫だよ。きっと、優希ちゃんの探してるものは逃げたりしな
いよ」

安心させるように、優希ちゃんの考えをあの廃校から離れるもの
へと変えるために言う。これで、駄目なら無理やり引っ張っていこ
うか、とか考えている。本当にできるかどうかはわからないけど。

「……そうだよ、ね。うん、きっと大丈夫、だよ」

俯いて自分に言い聞かせるように呟いている。僕は彼女がどんな
返事を返してくれるんだろうか、と思いながら待っている。

「うん、行こう、広也。広也が街の中を一人で歩いてるのを放って
おくのも心配だからね」

顔をあげて皮肉を言いながらも笑顔を浮かべてくれた。僕はそん

な優希ちゃんに苦笑をする。まあ、優希ちゃんの後半の言葉は照れ隠しだとも思っておいた。

三話

何の目的もなく街の中をぶらぶらと歩いていたらいつの間にか日は沈みかけ、辺りは薄暗くなり始めていた。太陽は頭の先の部分がかろうじて見えるくらいだから、あと数分もあれば完全に沈んでしまっただろう。

「優希ちゃん、今日はどうだった？」

僕は隣にいる優希ちゃんにそう聞く。今日は半ば僕が無理やりついてこさせたようなものだったからどう思っているのか気になっている。

あんまりよく思われてなかったら……もうどうしようもない。できるのはこれからはもう優希ちゃんをあつ廃校へと居続けさせてあげることぐらいだ。

「うーん、そんなに楽しいとは思わなかったけど、悪くはなかったよ」

なんとも微妙な感想だった。これは、僕が何か楽しませるためにいろいろと考えろ、ということなんだろうか。まあ、嫌ではなかったと言ってくれたんだから今はこれでよし、としておこう。

「今度、一緒に街に行くときは優希ちゃんのことを楽しませれるように頑張ってみるよ」

「ううん、そんなことしてくれなくてもいいよ。広也、わたしと一緒ににいたら変な目で見られちゃうよ？ 広也はただでさえ変な人なんだから、ずっとこんな調子だと広也を普通に見てくれる人がいなくなっちゃうよ？」

からかうような口調だけれど、それが僕のことを気遣ったの言葉だということはずぐに気がついた。

「別に僕はそんなふうに見られても全然いいんだけどね」

「わたしが、嫌、なんだよ。わたしのせいで広也が変な目で見られるっていうのが。この世界にちゃんと存在してないわたしのせいで

そうなってるっていうのが……」

「それは……」

それよりも、先の言葉は続けられなかった。優希ちゃんの浮かべている表情があまりにも悲しげだったから。

実は、優希ちゃんと一緒に歩いていて気がついたことがあった。

それは、僕以外の人には優希ちゃんの姿が見えていない、ということだ。

街の中を歩いていて変なものを見るような視線を何度か感じるこ
とがあった。最初のうちは浮かんではいる優希ちゃんの姿が珍しいか
らなのかな、と思っていた。だけど、心の片隅ではそれにしては、
静かすぎるとも思っていた。もう少し騒いだり、驚いたりしてもい
いんじゃないだろうか、と思っていた。

そして、その考えは当たっていた。変なものを見るような視線を
浴びていたのは僕だけだった。僕以外の人に優希ちゃんの姿は見え
ていなかった。

それに気がついたのは街を歩き始めてから三十分くらいは経った
時だった。僕が何も言わないときは視線を浴びることはなかった。

だけど、僕が優希ちゃんに話しかけたときには変なものを見るよう
な視線が向けられた。

だから、気が付いてしまった。優希ちゃんの姿は僕以外の人には
見えていないんだってことに。

でも、さっき、優希ちゃんに言ったように僕自身は他人から変な
目で見られようと別にかまわない。それよりも、優希ちゃんの存在
を否定している彼女自身のことのほうがよっぽど気にかかっている。
彼女は自分自身のことを世界にちゃんと存在していない、と言っ
た。その言葉は誤っていないんだと思う。優希ちゃんは幽霊で、僕
以外からは姿が見えていないのだから。

だけど、それが真実だとしても、そんな悲しい言葉は聞きたくな
かった。

優希ちゃんは悲しい、とか寂しい、とかの感情を隠そうとする。

それは、まだ僕と出会ったばかりだからなのかもしれないし、ただ単に彼女が優しくすぎるからかもしれない。

「……広也、立ち止まっちゃってどうしたの？」

先ほどよりも明るい声が、悲しい気持ちを隠すような声が聞こえてきた。あんなことを考えていたからそのように聞こえたのかもしれないけど。

僕はその声に反応して内側に向けていた意識を外側へと向ける。

そこは一軒の家の前だった。二階建てのどこにでもあるような一軒家だ。郵便受けにかけられている表札には『深山』と書かれている。

ここが僕の家だ。考えながらも家に帰れるっていうことは僕もこの街に慣れてきた、ということだろうか。まだ、知らない場所はたくさんあるけれど……。

「ここが僕の家だからね。優希ちゃんは、どうするの？……このまま僕の家泊まっていくな？」

廃校に戻るの？、と聞こうとしたけどそれを聞くのはやめておいた。あまり、優希ちゃんを一人にしたいくないからだ。

「広也は、わたしを泊めて変なことをするつもり？」

優希ちゃんは自分の身を守るように自らを自分の腕で強く抱きしめている。僕を見る彼女の瞳にからかいの色が浮かんでいるということはずいぶん気がついた。

まあ、本気で先ほど言ったように思っている、というわけではないようだ。とりあえずは信用されている、と思っていいたいだろう。

「変なことなんてしないよ」

「怪しいな」。女の子と一緒に何もしたくないなんてほんとう？」

「なんにもしないよ。ただ、優希ちゃんと一緒にいてあげたいと思っただけなんだ。優希ちゃん、寂しそう、だからさ」

どうやって切り返したらいいのかわからなかったので僕の思いを伝えた。想いつて言えるほど立派じゃないものだけど実際に表にしてみたらずかしかった。

普段こういうことを言うようなことってないからなあ、と自分の中で恥ずかしさを隠すためにそんなことを考える。

「え？……そう、なの？」

返ってきたのは戸惑いの言葉だった。で、僕は僕でそんな優希ちゃんの反応に戸惑ってしまう。

優希ちゃんなら、なにかっこつけて言ってるの？、とか言ってからかってくると思っていた。だから、この反応は意外すぎた。

「うん、そうだけど。……僕がそんなこと言ったら変だったかな？」
とりあえず、このまま僕までも黙ってたら優希ちゃんは黙ったまままでいそだったからそう言った。僕が言ったことが変なことだったから戸惑っているとは思ってない。彼女なら変だと思ってたら、素直にそれを言っ僕のことをからかっているだろうから。

「……そ、そうだよ！広也のくせにそんなかっこつけたようなこと言わないでよ！広也にそんな言葉は絶対に似合わないよ！」

何故か顔を赤らめて語気を強めて言ってきた。

「な、なんで怒ってるの？」

優希ちゃんの言動にたじろいでしまう。

「怒ってなんかないよっ！……広也があんなこと言うから——」
顔を赤くしたままそっぽを向いてしまう。そのせいで、優希ちゃんが最後になんて言ったのかが聞こえてこなかった。

「ねえ、優希ちゃん。最後になんて言ったの？よく聞こえなかったんだけど」

「なにも言っていないよ！わたし、もう帰るね！おやすみ！広也！」
そう言っ優希ちゃんは離れて行った。

「あ、うん。ばいばい、優希ちゃん！明日も、行くから待っててね！」

もう結構、距離が離れていたから僕はできるだけ大きな声を出して言った。優希ちゃんの背中はどうどんと遠ざかっていくだけだ、と、聞こえていたと思う。

まあ、聞こえてなくても、それはそれでもいいか。明日、また彼

女とは会うことができるんだから。

それにしても、あの優希ちゃんの反応はなんだったんだろうか。
なんだか不自然だった。

何かを隠しているような、そんな反応だった。優希ちゃんは何を
隠してたんだろうか。

うーん、と考え込んでみる。だけど、全然わからなかった。

仕方がないので僕は家の中に入ることにした。家の前で考え込んで
たらここを通った人に不審者だと思われるだろうな、と思ったか
ら。

四話

現在時刻午前七時三十分。さつさと朝食を食べてさつさと着替えた僕は家を出て優希ちゃんがいるであろう廃校を目指していた。そんな道の途中、

「あら、広也じゃない。こんな朝早くからどうしたのよ」

一人の少女が僕に話しかけてきた。

「え？あ、夕佳。僕は、これから山の中にある廃校に行こうと思ってるんだけど。夕佳こそ、どうしたの？」

「私は少し散歩をしていただけよ。それよりも、山の中に廃校なんであるの？」

彼女は興味深そうに聞いてきた。少し茶色のかかった気の強そうな瞳がこちらをじっと見てきている。

「うん。昨日偶然見つけたんだけど、古い木造の学校があるよ」

へえ、そうなの、と言いながら夕佳は何度か頷く。彼女の背中まである長い黒髪がそれに合わせて揺れる。

ちなみに彼女は僕のクラスメイトで友達である宮平夕佳だ。彼女も僕と同じで最近ここに引越してきたばかりらしい。

なんとなく気が合っているのか友達となっていた。お互いにここに引越してきたばかりだというのを知ったのは友達になった後だった。だから、お互いに引越してきたばかりだから仲が良くなったというわけではない。

「なんだか面白そうね。ついていてもいいかしら？」

目鼻の整った顔に笑顔を浮かべながら聞いてきた。

「え、えつと……」

優希ちゃんは幽霊だから他の人から見るできない。だけど、僕には何故だか見える。だから、もしかしたら夕佳にも見える、ということがあるかもしれないけど街での他の人たちの反応を見る限りではその可能性は少ないように思うけど。

「あ、嫌なら別にいいのよ。私は絶対についていきたいってわけでもないし」

そうは言っているけれど、明らかに夕佳は残念そうな表情を浮かべてる。何か可哀想なことをしているような気分になってしまう。

「別に、いいよ。ついてきても」

まあ、ついてこられてもいいか。僕が優希ちゃんと話してるところを夕佳に見られたら変な風に思われるだろうけど、そんなことを気にするようなつもりはない。

「え？いいの。ありがとう、広也」

それだけで、夕佳は嬉しそうな声を出した。

「あ、でも、その服装だと歩きにくいかもしれないよ。山の中に入って山道をそれたところを歩くからね」

今の夕佳の服装は白色のワンピースの上から薄手の淡い水色のパーカーを着たものだった。山に行く格好というよりも海に行くような格好だった。

夕佳は自分の姿を見下ろしている。

「うーん、そう？私は別にこれでも大丈夫だと思うわよ」

実はそんなに歩きにくい服装だというわけではないのだろうか。

男の僕は絶対にそんな恰好はしないのでどんな感じなのかわからない。

でも、とりあえず、もう一度注意はしておく。

「夕佳がそう言うんなら別にいいけど。本当にその格好だと歩きにくいと思うよ」

「大丈夫よ。それよりも、早く案内してよ」

夕佳は僕のことを急かすようにそう言ってきた。まだ、僕としては夕佳の服装のことが気になっていただけと本人がああ言ってるんだからいいか、と無理やり納得しておいた。

少しおぼろげな昨日の記憶を頼りになんとか廃校までたどり着く

ことが出来た。

「へえ、広也、よくこんなところ見つけたわね」

僕が服についた葉っぱとかを落としていたら後ろから夕佳の声が聞こえてきた。夕佳は僕の二、三步ほど後ろを歩いていたので廃校を見れるようになるのが僕よりも少し遅れる。

後ろを振り返ってみる。そこには予想通り感心したように廃校を見ている夕佳の姿があった。だけど、何か違和感がある。それは何だろうか、と確認するように僕は夕佳の姿を確認する。

山に入る前とは変っていない姿でいる。どこかを怪我しているわけでもなく、何かを失くしたように見えなく、逆に何かが増えたようにも見えない。

何も変わってない？

そこで、気がついた。夕佳は僕と違ってどこも汚れていなかった。あの道を服を汚しもせずに進むのは無理だと思う。

「ねえ、夕佳はあんな道を通ったのになんでどこも汚れてないの？」
とりあえず、疑問をぶつけてみる。

「それは私の進み方が上手だったからに決まっているでしょ？」

なに、当たり前のことを聞いているの？、とでも言いたげに僕に視線を向けてきた。

僕は納得が出来なくて言葉を続けようとしたけれど、

「男が細かいことを気にしたらダメよ。さ、早く行きましょ」

と言つて僕を置いてさっさと廃校の方へと行ってしまふ。そのせいで僕が何かを言う隙はなかった。

仕方なく僕はそれ以上、夕佳の服が汚れていなかったことは考えないようにして後ろ姿を追いかけた。

五話

「外の見かけどおり、中もぼろぼろなのね」

夕佳は周りを見回している。僕も周りを見回す。といっても、僕は優希ちゃんを探すただけだ。

優希ちゃんはどこにいるんだろうか。名前を呼んでみようと思ったけどこれで夕佳に優希ちゃんの姿が見えなかったら僕は単なる変な人だ。

「さつきも言っただけど、本当によくこんなところを見つけられたわね。それとも誰かにここに廃校があるってことを教えてもらったのかしら？」

「自分で見つけたんだよ。偶然にね」

昨日、散々優希ちゃんにからかわれてしまったので道に迷って、ということとは伏せておいた。

「そう、広也は山道をそれて道に迷って偶然にここを見つけたんだよね」

「うん、そうだよ。……？」

声に頷いてから疑問に思う。今は夕佳の声ではなかった。しかも声が聞こえてきたのは夕佳が今立っているのとは真逆の方からだった。だとしたら、考えられるのは一人しかいなかった。

僕は今夕佳がいる場所の反対側を見る。そこにいたのは案の定、優希ちゃんだった。昨日と変わらない姿で宙に浮かんでいる。

「おはよう。広也」

「うん。おはよう」

夕佳にどう見られようと構わない。僕以外には姿が見えていない、ということに気がついた時の優希ちゃんの悲しげな表情。決してその表情を見たくないから。だから、僕は優希ちゃんに普通に接してあげることにした。

気がつくと、優希ちゃんは安心したような表情と申し訳なさそう

な表情の二つが混ざったような表情を浮かべていた。

僕は気にしないでいいよ、というように微笑みを浮かべてみた。

優希ちゃん是不安だったんだろうな、と思う。唯一僕だけが優希ちゃんの姿や声を認識することが出来たということがちゃんと今日も続いているのかどうかすぐにも確かめたかったんだと思う。そして、僕に声をかけたらしっかりと返してもらえた。それが優希ちゃんが安心した理由だと思う。

だけど、優希ちゃんが話しかける時僕の前には夕佳がいた。夕佳がいる状態で僕が返事をすればおかしい人だと思われる、と思っていたのだろう。それでも、確認したかったから僕に話しかけてきた。それがもう一つの方、申し訳なさそうな表情を浮かべた理由。

「広也、邪魔をするのかもしれないけれど、一つ聞いてもいいかしら」

たぶん、僕がいきなり虚空に向かって挨拶をしたことを聞いてくるんだろう。嘘をつくつもりはない。真実をそのまま話すつもりだ。

「……その子は、誰？」

だけど、夕佳の口から出てきた言葉は予想外のものだった。だから、その言葉に僕は驚いてしまう。それは優希ちゃんも同じようだった。

僕たちは一瞬、顔を見合わせた後、同時に夕佳の方を見た。

「何よ。驚いたような顔を浮かべて。私はただ、その子が誰なのか、って聞いただけよ？」

どうやら、夕佳には優希ちゃんの姿が見えているようだ。でも、

夕佳のこの冷静さはあり得ない。

夕佳に優希ちゃんの姿が見えているのだとしても、今の優希ちゃんは宙に浮かんでいる状態だ。それを見て、驚かないはずがない。

ふと、夕佳の訝しげな視線を感じた。そういえば、夕佳の疑問に答えていなかった。

「あ、えっと、この子は優希ちゃん、っていうんだ」

そう言っ僕は未だに驚いて固まったままの優希ちゃんを夕佳の

前まで引つ張る。

「あ、あの、は、はじめまして。優希、つていいます」

僕と初めて出会ったときとは違って敬語だった。しかも、可愛らしくお辞儀までしている。

「優希ちゃんね、初めまして。私は宮平夕佳、です。好きなように呼んでくれて構わないわ」

僕と自己紹介をした時と全く同じように言った。夕佳は自分の名前を名乗るところだけは相手の年齢など関係なく敬語となる。

おそらくそれが、彼女なりの初対面の相手に対する礼儀なのだろう。本人から聞いたわけではないので実際のところはわからないけど。

「あ、あの、夕佳、さん」

優希ちゃんが夕佳のことを敬称付きで呼ぶ。それに、少し緊張しているようだった。そこから、優希ちゃんの僕と夕佳の扱いの違いがわかる。

「ん？なにかしら？」

夕佳が優希ちゃんの緊張をほぐすようにやわらかく微笑む。

なんだか今まで見たことのない姿だ。といっても、知りあつて今はまだ三カ月ほどだ。知らないことなんてまだまだあつて当たり前なのかもしれない。

「あの、夕佳さんにはわたしの姿、見えてるんですか？」

この反応で見えていないということはないだろうと思う。だけど、それでも優希ちゃんには不安なんだ。見えてるとわかっていても確認をとりたくなるほどに。

そして、僕は気がついた。彼女は寂しがり屋で、怖がりなのだと。「大丈夫よ。ちゃんと見えてるわよ。だから、安心して」

夕佳が優希ちゃんの頭へと腕を伸ばす。優希ちゃんは小さく、あ、という言葉をこぼした。

夕佳の手は優希ちゃんの頭を撫でていた。優しく微笑みかけている。

対して、優希ちゃんは安心したように、気持ち良さそうに目を閉じている。はたから見れば仲のいい姉妹のように見えた。

僕は僕で夕佳に聞きたいことがあったんだけど、この二人の間に入るのは無粋なような気がする。だから、僕は二人のことを見ていることしかできなかった。

「あ、あと、もう一つ聞いてもいいですか？」

優希ちゃん頭を撫でられたまま上目遣いで夕佳を見上げる。

「いいわよ。なんでも聞いてちょうだい」

「なんで、夕佳さんはわたしの姿を見ても驚かなかったんですか？」
それは僕が聞きたかったことだった。どうやら、優希ちゃんも僕と同じ疑問を持っていたようだ。

「ああ、そのことね。それは、簡単なことよ。私は強い靈感を持つてるの。そのおかげで毎日のように幽霊を見ているから慣れちゃったのよね」

平然と言つてのけた。

反対に僕と優希ちゃんは夕佳の言葉に呆然としてしまう。つていうか、優希ちゃんも何も知らなかったんだ。でも、死んでから今まで誰とも話したことがないって言っていたから当たり前なのかもしれない。

「……あれ？つていうことは、優希ちゃんが見える僕も靈感を持つてるってこと？」

優希ちゃんが見える、ということは僕も夕佳と同じように靈感を持つてることになるはずだ。

「さあ、どうかしら。……広也は今までに優希ちゃん以外に幽霊を見たことがある？」

「ううん、ないよ」

「それなら、広也に靈感はないわね」

はつきりと、言い切られてしまった。

「え？だったら、どうして僕には優希ちゃんの姿が見えるの？」

「ふふ、それはあなたたちの魂の形が似てるっていうことよ」

何故か夕佳は微笑まじげな表情を浮かべながら答えてくれた。夕佳の言ったことの意味はわからない。

「夕佳さん、魂の形が似ているってことは、どういうことですか？」
優希ちゃんが不思議がるように聞いていた。どうやら、彼女も僕と同じように夕佳の言葉に疑問を持ったようだった。

「簡単に言えば二人にとってお互いは特別な存在ってことよ」

特別な存在、と言われてもぴん、と来なかった。僕は首を傾げてしまう。

「広也、ちょっとそこで待ってて」

だけど、優希ちゃんは違ったようだ。僕を制止させ夕佳の手を引っ張って僕から離れていく。

「特別な存在って——」

それよりも後の言葉は声が小さすぎたから聞こえてこなかった。だけど、優希ちゃんの顔が少しずつ赤くなっているような気がするから、彼女にとって恥ずかしいことを言っているんだと思う。何を言ってるんだろうか。

「別に、そう言うわけでもないわよ。まあでも、特別な存在が、う

夕佳は優希ちゃんに聞かれたことを僕に隠すつもりはないのか僕の方まで届くような声量で言っている。このままいけば優希ちゃんがなんと言ったのかわかると思った。だけど、夕佳が一番重要なところを言う直前に優希ちゃんはその口を手で抑えてしまった。

そんなに聞かれたくないことなんだろうか。気になるけど、わざわざ僕から離れて行ったんだから、僕が聞いたところで教えてくれるとは思わない。

仕方がないので、二人の話が終わるまでもう少し待っている。

「あ、もしかして、優希ちゃんって——」

突然、夕佳は優希ちゃんの耳に顔を近づけた。たぶん、小声で何かを言ってるんだと思う。

そう思っていたら優希ちゃんがさきほどよりも顔を赤くして頭を

左右に振っていた。対して夕佳はそれを楽しそうに見ている。

ほんとう、二人は何の話をしているんだろうか。かなり、気になつてきた。

「ねえ、二人とも、なんの話をしてるの？」

我慢が出来なくなつたからそう言いながら近づいていく。

「ん？それは――」

「ゆ、夕佳さん！」

優希ちゃんが叫ぶように言つて夕佳の言葉を遮つてしまった。

「ひ、広也には関係ないことだよ！だから、何を聞かれても答えないからね！」

それから、僕の方を向いてすごい剣幕でそんなことを言つてきた。少し驚いてしまった僕は反射的に頷いてしまう。

それから優希ちゃんは僕のことを顔を赤くしたまま軽く睨んだ後、そっぽを向いてしまう。そんなに聞かれたくないことだったんだろうか。

そういえば、昨日も別れ際に同じようなやり取りをしたような気がする。睨みつけてきたりはしてこなかったけど、顔を赤くしてそっぽを向けたというのは昨日あったままだ。

「ま、そうね。優希ちゃんが関係ないつて言うなら関係ないつていうことにしとくわ」

夕佳は暗に僕に関係ある話だったということと言つた。

「あ、そうだ。あとで、話の続き、しましょう？」

「しません！話はあれでもう終わりました！」

怒つたように言つてどこかに行つてしまった。追いかける暇もなかったのですぐに姿が見えなくなった。

「あらら、怒らせちゃったわ」

悪戯っぽくそんなことを言う。

「でも、優希ちゃんって可愛いじゃない。ちゃんと、大切にしてくれるのよ」

「なんで、そんなことを僕に言うの？」

訳がわからず僕は首をかしげる。なんで、大切にしておけるのよ、とか言われるのだろうか？

「それは、いつか気づくわよ。それに、もし気がつかなかったとしても私が気付かせてあげるわ」

なにかを企むような笑みを浮かべる。何かを楽しんでるっていうのも混ざっているような気がする。

夕佳はなにを楽しんでるんだろうか。

「まあ、そんなこと今はどうでもよく……はないけど、先に優希ちゃんを探しましょう？」

そういえばそうだった。今はどこかに行ってしまった優希ちゃんを探すのを最初にしなければいけない。

僕は頷いて、夕佳とともに優希ちゃんが飛んで行った方へと歩いて行った。

六話

優希ちゃん探し始めてから二十分くらい後。やっと優希ちゃんを見つけることが出来た。どうやら、向こうも途中からは僕たちを探していたようで何度も行き違いがあつたようだ。おとなしく、どこかで待っていればよかった、と思うけど今さらそんなことを思っても仕方がない。

見つかったのだから、それでよしとしよう。

「この学校にある、何か、ねえ。それだけだと、何を探せばいいのかさっぱりね」

僕と優希ちゃんの前を歩いている夕佳が呟くようにそう言う。僕たち三人は周りをきよきよと見回しながら歩いている。

僕たちは今、この学校にある優希ちゃんが気になる何か、を探している。昨日優希ちゃんは何気なく言っただろうけど僕の中ではとても気になっていることだった。

もしかしたら、優希ちゃんが幽霊になってこんなところにいる理由なんじゃないだろうか、と思つて。

だけど、夕佳が言つたようにそれをどうやって探せばいいのか、というのはいらないのだ。それは物なのかもしれないし、者なのかもしれない。それにもしたら、優希ちゃんの記憶そのもの、という可能性もある。まあ、でも、こんな場所なので者、ということはないと思う。ここには誰もいないのだから。

そうなると、優希ちゃんの気になっている何か、というのは物か記憶かのどちらか、ということになる。

とりあえず、今は夕佳の提案で優希ちゃんの気になるものは物だと仮定して探している。それは、優希ちゃんの気になるものが万が一に記憶だったとしても物を探しているうちに記憶を見つけられるかもしれない、ということだからだそうだ。

さすがは靈感があり、たくさん幽霊と関わってきた、という夕

佳だ。なんだか、その言葉には説得力があった。

と、いうことで、今、僕たちは当てもなくこの廃校の中をうろついている。

「そういえば、優希ちゃんは生前のこと、どれくらい覚えてるの？」
何かのヒントになるかもしれない、と思って僕は聞いてみた。だけれど、その直後に僕はそのことを後悔してしまう。

優希ちゃんはこのことを聞かれるのが嫌じゃないだろうか、と思ったからだ。自分が死んでいる、ということ聞かれて嫌な気持ちにならない人がいるはずがない。それは、優希ちゃんだって例外ではないはずだ。

けれど、それは単なる考えすぎであつたようだ。

「生前のこと？うーん、どうだろう。結構、曖昧になっちゃってることとかけっこうあるし……」

うーん、と腕を組んで考え込む。生前のことを聞かれるのが嫌とか、そういうのはなさそうだ。

「生前の記憶の中にこの学校のことはあるの？」

嫌じゃないなら、こうやっていろんな質問をして、少しずつ優希ちゃんの記憶を掘り進んでいってみよう。そうすることによって、優希ちゃんが気になるものがなんなのかわかるかもしれない。

「うっん、ないよ」

すぐに首を振って答えてくれる。

「それじゃあ、こういうところに廃校があるっていうのを教えてもらった記憶は？」

「ない、ような気がする」

本人もよくわからないようだ。なんだか、答える声に自信がなさげだった。これは誰かに教えてもらったということなんだろうか？でも、まだ断言はできない。なので、次の質問をすることにした。

「僕と夕佳以外で思い浮かぶ人はいる？」

「広也と夕佳さん以外の人……」

腕を組んで考え込んでその場で止まってしまう。僕もその隣で立

ち止まる。

「夕佳」

僕たちの前を歩いている夕佳に声をかける。僕たちの方を振り返った夕佳は何も言わずに立ち止まってくれた。

後ろで僕たちが話をしていたのは聞こえていたはずだから僕が何を言おうとしたのかわかってくれたのだろう。

それから、一分ぐらいして、優希ちゃんはようやく口を開いて答えてくれた。

「お父さんと、お母さん……」

最初に思い浮かんだのは両親か。それが意味することは……僕なんかではわからない。僕は探偵ではないし、ましてや人の心が読めたりするわけではない。そもそも、人の心が読めるんならわざわざこんなことをする必要もないか。

そんな風に、思考が本題からずれていつてしまう。

「あ、そうだ。そういえば、この場所はお父さんとお母さんに教えてもらったんだ」

「え！そうなの？それじゃあ、もうちょっと思い出せないかな？何のためにここに來たのか、とかさ」

「うーん……」

腕を組み、眉根にしわをよせる。今までの中では一番考え込んでいる、という感じだった。

「むむむむ……」

変なうめき声を出している。本当にすごく考え込んでいるようだ。そのまま一分、二分、三分、と過ぎていく。その間、僕と夕佳は優希ちゃんのことをじっと見つめていた。これで、何か手掛かりが見つかればいい、僕はそう思いながら。

「うー、駄目だ。思いだせないよ」

五分ほどして、ようやく優希ちゃんはそう言った。考えすぎて頭が痛いのか、頭を少し押さえている。

「そっか……。まあ、あんまり無理して思い出そうとしなくてもいい

いよ。この廃校が優希ちゃんの記憶に関係してるってことはわかってるんだからうろろしてればまた何か思い出すよ」

「そうかもしれないけど、わたしは一年もここにいて何も見つかられてないんだよ。この中を周るだけでわたしの記憶が甦るとは思わないよ」

優希ちゃんの声がだんだんと暗くなり始めてきた。どうしよう、何を言ってあげればいいんだろう、何をしてあげればいいんだろう。そう思うのに、なにも思い浮かばない。

「……幽霊っていうのは記憶から抜け落ちた場所を自分の意志とは関係なく避ける、っていう習性があるのよ。だから、私たちと一緒にいればそういう場所を避けることがなくなって今まで優希ちゃんが行ったことがない場所に行けて記憶が少しだけかもしれないけど戻るかもしれないわよ」

すらすらと、淀みなく夕佳はそう説明を——いや、優希ちゃんに希望を持たせるような言葉を口にした。

「え？そんなんですか？でも、わたしは全ての場所を周ったはずですよ？」

「無意識に避けてるから優希ちゃんの主観は関係なくなるわ。探し物をするときだってそうでしょう？すべての場所を探したつもりでも、もう一度同じ場所を探したら探し物が見つかった、ってことがそれが、目の前に探し物があっても見つからないっていう感じになったのと同じよ」

「そんなものなんですか？」

「そ。そんなものなのよ。だから、早く校舎の中を周ってみましょう？」

「でも、もし、何も見つからなかったら……」

不安そうに顔を伏せる。こういう時なら僕でも言えることがある。「探す前から、見つからない、なんて考えてちゃ駄目だよ。見つかるまで僕と一緒に探してあげるよ。それに、もし、優希ちゃんが諦めたら僕は一人で探すよ。優希ちゃんのためにさ」

しょせん、幽霊に関する知識も落ち込んでいる人を励ます経験もないからこれくらいしか言えないけど、優希ちゃんを何とかしてあげたい、と思っっているのは本当の気持ちだ。

このまま、優希ちゃんを放っておけるはずがない。優希ちゃんと一度関わってしまったからには最後まで付き合ってあげたい。

「ひ、広也のくせに、かつこつけたようなこと言わないでよ」

僕が似合わないことを言ったのが気に入らないのかそっぽを向いてしまう。そんな行動をとられると、少し傷つく。

だけど、わずかに見える優希ちゃんの横顔は、かすかに赤くなっているような気がする。うーん、照れているんだか、怒っているんだかよくわからない。

「可愛い反応してるじゃない。やっぱり、優希ちゃんって広也のとが——」

「ぜつつたいに、そんなことないですから！もう、その話はやめてください！」

大声をあげて、夕佳がそれ以上続けるのを遮った。大声を上げたからなのか、それとも別の何かのせいなのか優希ちゃんの顔は真っ赤になっている。

なんだか、さっきも同じようなことがあったな、と僕は二人を眺めていた。

七話

「え？普通の人に幽霊の姿を見せる裏技があるんですか？」

優希ちゃんがなんとか落ち着き彼女の気になるもの探しを再開してから十分ほどしたときに夕佳が言った言葉に優希ちゃんはそう返した。不思議そうな、意外そうな、そんな声だった。

「ええ、生きている人間らしくふるまえば普通の人にも姿を見せられるようになるのよ」

「生きている人間らしくって、たとえば、どうするんですか？」

僕たち以外にも姿を見せれるようになる、というのに興味があるらしく熱心に話を聞いている。しかも、夕佳の前にいて進行方向に背を向けて夕佳の方に体を前のめりにしている。

「地面に足をつけて歩けばいいのよ。普通の人そんなふうに浮いてたりはしないでしょう？」

「そうですね。……じゃあ、ちょっとやってみます」

そう言って、優希ちゃんは何故か僕の隣にやってきた。それから、足を木の床の上へとおろした。

今のところは普通に立っているように見える。おかしいところはどこにもなかった。

そして、彼女は歩き始めた。だけど、それはどこかが不自然だった。

「ど、どうかな？」

敬語じゃなかったからたぶん僕に話しかけてきたんだと思う。嘘を言っても仕方がないので、僕は正直に言う。

「なんか不自然だよ」

「どこが？」

詳しい説明まで求められた。僕は具体的にどこが不自然なのかわかっていないので、教えようはない。

もしかしたら、夕佳ならどこが不自然なのか気が付いてるんじゃない

ないだろうか、と思ってそっちの方をしてみる。そうしたら、何故か微笑みを返された。僕が答える、ということなんだろうか。

「……あの、ごめん、優希ちゃん。具体的にどこが、ってのがわからなかったから、もう一回歩いてみてくれるかな？」

夕佳は何も言ってくれないから僕はそういうことしか言う事が出来なかった。

「やだよ。わざわざ他人に不自然、っていわれるような歩き方をするなんて」

「でも、そうしてくれないと、僕、何も説明できないんだけど」

「広也が頑張ってる思い出せばいいんだよ。ううん、むしろ、思い出せ、かな」

命令だった。やっぱりわがままだな、と思いながらも僕は優希ちゃんがどんなふうに歩いていたのか思い出そうとした。

あのときの彼女の歩き方。それは、足の運び方がぎこちなかった。それは仕方ないことだと思う。そういうことをするのは慣れていないだろうから。それが、不自然さであったような気がする。

でも、足の運びがぎこちないのは幽霊でない人がやっていてもおかしいことではない。だけど、その中に隠れた不自然さは幽霊だけがもつものだったような気がする。

もう少し頑張ってるあのときの優希ちゃんの歩き方を思い出してみる。

そういえば、あの時の彼女は滑っているように見えた。足の動きと、体の進み方が合っていなかったのだ。

そうだ。これが、彼女の歩き方の不自然なところだ。なんとか、どこが不自然なのか気がつくことが出来たのでほっとした。

「優希ちゃん、わかったよ。どこが不自然だったのか、ってこと」

「あ、やっとわかったんだ。それで、どこがおかしかったの？」

窓から外を眺めていた優希ちゃんがこちらを振り向く。

「うん、優希ちゃんは足の動きと体の進み方が合ってなかったんだよ。簡単に言えば、優希ちゃんは少し滑りながら移動してるように

見えたんだよ」

優希ちゃんはよくわからない、というふうに首をかしげる。それから、確認をするようにもう一度床に足をつけて歩き始めた。

だけど、さっきの僕の言葉を気にしているせいかなり歩き方が不自然だった。

なぜか、つま先立ちをしているし、そのつま先だって床についているようで微妙に浮いている。

「ねえ、優希ちゃん、すごく歩き方がおかしいんだけど」

「わかってるよ！広也がいろいろと言うから普通に出来なくなったんだよ！」

怒られてしまった。他人の言葉を気にするとうまく出来なくなる人がいるけど、優希ちゃんもそういう類の人だったようだ。

ていうか、優希ちゃんが僕に思い出させて言ったから僕は頑張ってる思い出してあげただけ。それなのに怒られるなんて不条理だ……。

「広也、どうしたのよ。へこんじゃって」

今まで見ていただけだった夕佳が僕に話しかけてきた。

「優希ちゃんが、不条理だからね、ちよつと……」

「それは、ただ単に照れてるだけよ。……ねっ、優希ちゃん」

「え？あ、あの、いきなり、話を振られても困るんですけど」

聞こえていなかったのか、それとも聞いていなかったのか優希ちゃんも困ったようにそう言う。

「あのね。優希ちゃんが広也に怒ってるのは自分がちゃんと歩けないのを広也に見られて恥ずかしいからよね？、って聞いたかったのよ」

「……ち、違いますよ！広也に怒ったのは、その……広也がいろんなことを言ったせいでちゃんと歩けなくなったからで、恥ずかしかったとか、そういうのは関係ないです……」

最初は夕佳の顔を真正面から見たまま答えていたけれど、徐々に視線が関係ない方向を向いて、最終的には顔をそらしていた。

凶星だった、ってことなんだと思う。まあ、確かに他人に自分の恥ずかしいところを見られるのは恥ずかしいかもしれない。だけど、「恥ずかしいから、って僕に怒らなくても……」

「うるさいっ！ 広也は黙っててよ！」

また怒られてしまった。っていうか、これは八つ当たりなんじゃないだろうか。

「ほらほら、優希ちゃん落ち着いて。そんなふうに言ってるとう広也に嫌われちゃうわよ」

「夕佳さん、同じようなことばかり言わないでください！ 夕佳さんは放っておいて行こう、広也」

優希ちゃんは夕佳のいない方に向いたと思ったたらいきなり僕の左腕を掴んで僕のことを引っ張った。

「ちよ、ちよっと、優希ちゃん、速いから待って！」

「広也が遅いんだよ！」

速度を緩めることなく優希ちゃんはどんどん進んでいく。

僕は、ちらり、と後ろを振り返ってみた。だけど、そこに夕佳の姿は見えなかった。でも、振り返れたのは半分くらいだったからちよとど死角にいるのかもしれない。そう思って、今度は反対側から後ろを振り向こうとしたら、横の方に引っ張られ、しかも何かに足を引っかけた。

そして、そのまま転んでしまう。

「いたたた……」

おでこを思いっきり打ってしまった。右手で先ほどぶつけた部分を押さえる。

どこにぶつけたんだろう、と思って前を見てみるとそこには階段があった。たぶん、というか絶対にここで足をひっかけて転んでおでこをぶつけてしまったんだと思う。

「優希ちゃん、階段があるんなら言つてよ」

「広也がちゃんと前を向いてついてこないからいけないんだよ」

確かにそうだろうけど……。

まあ、一応優希ちゃんの言っていることは正論なので何も言い返さないでおく。

それから、廊下の方を覗いて見た。

そこには、真っ直ぐな木の床が向こうの方まで続いていて所々外の光が当たっている、という光景だけがあった。夕佳の姿はどこにもなかった。夕佳はどこに行ったんだろうか。

「広也、何見てるの？」

優希ちゃんも僕と同じように廊下を覗く。

「夕佳がどこに行ったのかな、って思ってたね。……夕佳なら追いかけてくると思っただけで、いないね」

「夕佳さんのことなんて知らないよ。あんなことばかり言う人は放っとけばいいんだよ」

なにやら優希ちゃんは怒っているようだった。昨日、僕が接した優希ちゃんが普段の状態なら、こうして転んだ僕のことを笑っていたと思う。

どうやら、優希ちゃんの中での夕佳に対する好感度は不機嫌になるほど下がってしまっているようだ。

「優希ちゃんは、何を怒ってるの？」

でも、そうやって、不機嫌になってしまう理由がわからなかった。「何も怒ってないし、広也には関係ないよ！」

ぷいっ、と顔を背けてしまう。明らかに怒っているのに、怒っていない、という優希ちゃんに対してどのような行動をとればいいのか僕は戸惑ってしまう。

「広也！そんな所で立ち止まってないで早く行くよ！」

突然、優希ちゃんにまた左腕を掴まれた。どうやら、優希ちゃんを落ち着かせるにはこのまま振り回されているしかないようだ。

「ごめん、夕佳、と心の中で謝ってから、今度は転ばないように優希ちゃんの進む速度に合わせて階段を上がった。」

八話

結局、あれから三十分くらい優希ちゃんに振り回され続けていた。でも、どうやら怒っていても目的は忘れていないようで時々部屋の中に入ったりはした。だけど、やっぱり、冷静さはかけていたようで僕が詳しく調べようとしたら引きずられて別のところへと連れて行かれた。

しかも、ここの廃校はそれほど広くないので何度も同じところに入ったりもした。なので、結構疲れている。

そうして、やっと優希ちゃんの暴走はあるひとつの部屋で止まった。

「優希ちゃん、やっと、落ち着いた？」

優希ちゃんの進む速度は結構速かったから少し息が上がってしまったっている。

「え？あ、うん」

こちらを振り返り素直に頷いてくれた。よかった、ちゃんと落ち着いてくれているみたいだ。

それよりも、ここはどこだろうか。

僕は部屋の中を見してみる。

この部屋にはグランドピアノが置かれていた。だけど、ずっと放置され続けていたせいかわかり、所々朽ちてしまっている。それから視線に入ってきたのは額縁、だけだった。そこに飾られていたであろう写真か絵はどこにもなかった。だけど、そこにどのような写真か、絵があったのかは想像がつく。この部屋の雰囲気から。

ここは、かつては音楽室だった場所なのだろう。そんな雰囲気はこの部屋は持っている。

そういえば、と思う。さっきまで散々優希ちゃんに振り回されていたけれど一度もこの部屋には入っていない。まあ、ここは廊下の

突き当たりに位置しているから曲がり角があれば曲がる、という進み方をすれば入ることはなかったかもしれない。

そう言う意味では、優希ちゃんがこの部屋に入った時点で落ち着きを取り戻していた、ってことになるんだと思う。

「とりあえず、この部屋から調べてみよう……か？」

なんだか優希ちゃんの様子がおかしかった。といっても、ぼーっとしているように見えるだけで、それ以上は何もない。だけど、気になることは気になる。

「優希ちゃん？……どうしたの？」

「……え？う、ううん、どうもしてないよ」

少し反応が返ってくるのが遅かった。

「本当？でも、優希ちゃん、ちよっとぼーっとしてたよ」

「そうだったの？……でも、まあ、そんなことどうでもいいよ。早くこの部屋に何かないか探してみようよ」

本当にどうでもいいことなんだろうか。でも、本人がどうでもいいって言ってるんだからこれ以上気にするのはやめとこう。

まずはどこを見てみようかな、と僕は再度部屋を見回してみる。

そうしていたら、誰かに左腕を引っ張られた。そういえば、僕の腕、優希ちゃんに握られたままだった。

そのことに、優希ちゃんも気がついたようだ。でも、僕の腕を掴んだときは冷静じゃなかったから掴んだ、ということにさえ気がついてなかったかもしれない。

「え？あ……、あわわ、ご、ごめん、広也」

優希ちゃんは、ぼっ、と僕の腕を放す。何故だかなり取り乱しているようだった。顔まで赤くなっている。

「うん、別に謝らなくてもいいけど……どうしたの？顔、真っ赤になってるよ」

調子が悪いのかな？でも、幽霊に調子がいいとか悪いとかってあるんだろうか。

「赤くなんかなってないよ！広也のバカっ！早くこの部屋を調べる

よ！」

何故か、バカ、と言われてしまった。そして、優希ちゃんはそのまま部屋の隅の方へと一人で行ってしまった。

でも、まあ、調子が悪いみたいじゃないからよかった。

そう思っ僕もこの部屋を調べ始めた。

「優希ちゃん、何か見つけた？」

一通り部屋の中を調べ終わった後、僕は優希ちゃんにそう聞いた。
「ううん、別に何も見つけられなかったよ。広也は？」

「僕も同じ。特に何も見つけられなかった」

優希ちゃんのものについて探しているわけだから優希ちゃんが何も見つけられないっていうのは予想ができていた。だけど、何を見つけてもとりあえずは見つけたことになる僕までもが何も見つけられないとは思わなかった。

この部屋にあるのはもう誰も弾くことのできないグランドピアノと何も入っていない額縁だけのようだ。この部屋にある棚とかを開けてみても全部空だった。

「どうしようか……」

この部屋から動くべきなんだろうけど、まだこの部屋を調べる必要があるように思う。何故なら、

「ねえ、優希ちゃん」

「……え？なにになに？」

優希ちゃんは先ほどから何度かこのようにぼーっとしていることがあった。

「優希ちゃんはこの部屋に、何か気になるものでもあるの？」

「ううん、気になる、っていえば気になる、ってことになるんだろうけど……こう、なんだか引かかるんだよね」

そう言っ僕希ちゃんは部屋の中を見回した。僕もつられて一緒に見回してみた。だけど、特に変わったところはなかった。

「こうして見た限りだと、何もないよね」

「うん、そうなんだけど……。何かが、気になるんだよね」

それから、僕たち二人は黙っているままだった。ここに調べられるような場所はない。だけど、優希ちゃんの反応からしてここには何かがあるはずだ。

そう思っていたら、突然、優希ちゃんが口を開いた。

「……実はね、わたし、この部屋に来るの初めてなんだ」

「えっ？ そうなの？」

僕の確認するような言葉に優希ちゃんは頷く。夕佳が言っていた、無意識のうちに避ける場所がある、というのは本当だったんだ。

だったら、ここに何かがある、というのは明白だ。

「じゃあ、優希ちゃんに関する何かはここにあるんだろうね。……幽霊になってるってことはさ、生身の状態じゃできなかったこともできるようになってるんじゃないかな？ こう、優希ちゃんの探しているものがどこにあるのかその気配を感じるとか、そんな感じのこと」

とりあえず、出来ることをやってみよう、ということとで適当に思い浮かんだことを言ってみる。

「どうやって？」

どうやら、優希ちゃんは僕が言ったようなことを出来ないようだ。ていうか、幽霊自体が出来るのかどうかが怪しい。

でも、このまま諦めても進展はない。だから、僕はさらに考えてみる。しよせん、適当に思い浮かんだことだけれど、何もしないよりはましだ、ということとで言葉にしてみる。

「……意識を集中させてみたらどうかかな？ その、優希ちゃんの中にある引っかかりだけに意識を向けるような感じでさ」

「……うん、わかった、やってみる」

優希ちゃんは頷いて、ぎゅっ、と目を閉じる。僕はただそんな優希ちゃんの姿を見守ることしかできない。

「……」

「……」

静寂だけが部屋の中を満たす。時折、外から蝉の鳴き声や木が揺れる音が聞こえてくるけれど、それらはすぐに静寂の中に溶け込んでしまう。それくらい、僕たちの周りは静かになっていた。

ただ、一つ規則的に聞こえてくるものがあって、それは僕の呼吸の音。僕が生きていると証明するものだった。

それを聞いていると悲しくなってくる。僕の呼吸の音が聞こえるからじゃない、優希ちゃんの呼吸の音が聞こえてこないからだ。

静かになると、彼女がもうとくに死んでしまっているんだと再確認させられる。そうさせられるとひどく悲しい気持ちになる。

彼女は僕の前で笑って、怒って、照れて、そんなふうに生きている人間と変わらない行動をする。それに、僕と優希ちゃんには特別なつながりがあるおかげか僕は彼女の温もりをも感じることが出来た。それなのに、そうだというのに、彼女は死んでいる。自分は死んでいるんだと自覚して、特別な人以外には姿も見てもらえない。そんな、悲しい存在があるだろうか。

「広也……」

小さく、僕を呼ぶ声。その声で、僕ははっ、として考えるのをやめる。

「あ、優希ちゃん、どうしたの？どこにあるのかわかった？」

それから、無理やり笑みを浮かべて、何も聞かれないように、とこちらから先に問いかけておく。

「……」

どこか、悲しそうな表情で僕を見た後、

「うっん、広也の言う通りにやってみただけど、わかんなかったよ」
首を振って言った。

先ほどの悲しそうな表情。それは、何もわからなかったからなのか、それとも、僕の表情を見てしまったからなのか……。

「やっぱり、広也の言うことは全然駄目だね。役に立たないよ」
明るい声でそう言った。そういえば、今日は優希ちゃんの明るい

声を聞くのはこれが初めてだったような気がする。何故か怒ってばかりだったから、僕をこうしてバカにするようなことは言っていなかった。

「そんなこと言わないでよ。僕だって必死に考えたんだよ」

「ほんと？ 実は適当に思い浮かんだことを言っただけじゃないの？」
「やっぱり、優希ちゃんは鋭かった。」

「うっ……。まあ、確かに思い浮かんだことを言っただけど、なにもしないよりはましでしょ？ それに、実際にやったのは優希ちゃんだし……」

「そ、それは、そうだけど……。広也のくせに、生意気だよ！」
逆切れされてしまった。

「ねえ、優希ちゃん、ってさとき自分が不条理なこと言ってるって気が付いてる？」

「知らないよ！」

うわ、怒鳴ってきた。

情緒不安定だなあ、と思って今は優希ちゃんを見ていることしかできない。今は何を言っても優希ちゃんを怒らせるか不機嫌にさせてしまうような気がする。

だから僕は黙っていることに決めた。優希ちゃんも黙っているつもりのもうで何も言っていけない。

「……」

「……」

気まずい沈黙が流れる。さっきの沈黙とは違って重さのようなものを感ずる。

「……あの、優希ちゃん？」

沈黙に耐えきれなくて僕は口を開いてしまう。なに？、といった感じに優希ちゃんはこちらを振り向く。

「別の場所も調べてみようか。そうしたら、何か別の方法とか別のものとか見つけられるかもしれないよ」

何かすることがあれば沈黙しててもある程度、沈黙に耐えられる

と思ってそう言っていた。

「……そうだね。そうしよつか。じゃあ、行こ」

すでに、優希ちゃんの声は落ち着いていた。むしろ、ホッとして
いるような感じだった。もしかしたら、優希ちゃんも沈黙に耐えれ
なくなってたのかもしれない。

僕もホッとした。正直、気まづいままだなんて嫌だったから。

「広也、どうしたの？早く、行こっ」

「あ、うん、ちょっと待って、今行くから」

先に部屋を出ていた優希ちゃんを追いかけて僕もこの音楽室をあ
とにした。

九話

「そろそろ、暗くなってきたわね。私はそろそろ帰るけど、広也はどうするのかしら？」

夕佳の言う通り廃校の中は薄暗くなり始めていた。ここは、周囲が木に囲まれているので、陽が沈みかけるとすぐに暗くなってしまふようだ。

「僕もそろそろ帰るよ。優希ちゃんはどうするの？ 今日、僕の家までついてくるの？」

「うん、そうだね。夕佳さんがいても、広也が一人で帰れるか心配だからついていくよ」

からかうような口調でそう言われた。僕が昨日、道に迷って帰れなくなったことは優希ちゃんにとって僕をからかうためのいい材料となってしまうているようだ。

「いや、もうさすがに迷ったりはしないから」

「ほんとう？ 広也のことだから、帰る途中でいきなり道じゃない所に入って、迷子になるんじゃない？」

「さすがに帰る、って決めたら真っ直ぐに帰るよ」

「うん、確かにそうじゃないと、単なるバカな人だね」

朗らかに笑いながら言ってくれた。

「優希ちゃん——」

「はいはい、広也、帰るつもりがあるんなら早く帰るわよ」

優希ちゃんに、そうやって、僕をからかうのをやめてほしいんだけど、と言おうとした。だけど、夕佳に途中で邪魔されたせいで、言えたのは優希ちゃんの名前だけだった。

「優希ちゃんも、そんなに広也のことをからかっていたいんなら今日から広也の家に泊っちゃいなさいよ。そうすれば、好きなだけからかってあげれるし、甘えられるわよ」

からかうのと、甘えるのって一緒になることがない言葉のような

気がする。

「夕佳さん、そう言う話はやめてください、って言いましたよね！」
そう言って、優希ちゃんは夕佳から顔を背けてしまう。

優希ちゃん、夕佳に僕に関する話をされるたびに機嫌が悪くなっているような気がする。僕のことを嫌いなんだろうか。

でも、僕と優希ちゃんの二人だけでいたときはとくに嫌がっているような素振りを見せなかったからそれはないような気がする。嫌だっという気持ちを隠すようなこともしてないと思うし。

それだから、なんで優希ちゃんが不機嫌になるのか全然わからない。

「あらら、またまた怒らせちゃったわね。……じゃあ、私は一人で帰るわ。優希ちゃん、二人っきりの時間は譲ってあげるから、しっかりやるのよ。広也は、優希ちゃんの気持ちにちゃんと気がついてあげるのよ」

そう言い残して夕佳は帰っていきこうとする。

「ちよつと、夕佳、待って！」

僕は夕佳のことを追いかけようとした。だけど、このまま不機嫌な優希ちゃんを置いていくわけにもいかない、と思ってその場に留まる。

「優希ちゃん、どうして怒ったの？」

今だに、そっぽを向いたままの優希ちゃんに聞く。

「夕佳さんが悪いんだよ。わたしが話してほしくないってことを話すから！」

結構怒っているようで、まだ語気が荒い。だけど、優希ちゃんが言ったことには少し気になることがあった。

「ねえ、優希ちゃんがしてほしくない話って、僕に関すること？」

「……」

何も答えてくれなかった。とりあえず、その沈黙は肯定であったと思っておく。

「じゃあ、優希ちゃんはなんで、夕佳に僕の話をしてほしくなかった

たの？」

「そ、それは、広也が気にすることじゃないよ。広也だってあるでしょ？特に理由もなくしてほしくないこと」

「いや、僕はないけど」

「っていうか、理由もなく僕の話してほしくないって、それ、さりげなく僕のこと嫌ってるよね、と続けようとしたけど、

「あるんだよ！」

優希ちゃんに怒鳴られて、先は続けられなかった。

「あ、あの、優希ちゃん、落ち着いて」

とにかく、優希ちゃんの気持ちをなだめようとそう言う。

「うう、広也のバカ！早く帰るよ！」

でも、効果はなかったみたいだ。そっぽを向いたまま進んでしまう。しかも、今朝と同じように僕の左腕を掴んで。

「こつやつて、わざわざ引張っていくってことは僕のことを嫌いだって言う訳じゃないんだと思う。そして、だからこそよくわからない。優希ちゃんが夕佳に僕の話をして怒る理由が。」

「さ、ついたよ。広也の家」

「確かについたけど、なんで優希ちゃんはずっと僕のことを引張ってたの？」

僕はそう言うて軽く左腕を持ち上げる。それと一緒に、横に並んでる優希ちゃんの腕も持ち上げる。

廃校で腕を掴まれてからずっとここまで引張られてきた。

途中で止めようとしたんだけど、速い速度で進んでいくので転ばないように優希ちゃんについていくのに精いっぱいそんな余裕はなかった。

「それは、絶対に広也が道に迷わないようにするためだよ」

得意そうに胸を張って言った。どうやら、とことん僕のことをからかいたいようだ。

だけど、よく見てみると、優希ちゃんの顔は微かに赤く染まっていた。

どうしたんだろう、と考えようとして気がついた。そっか、女の子だから、そういうこと、気にするんだよね。

そういえば、今日の朝も音楽室まで引つ張られていって、優希ちゃんが僕の腕を掴んでるのに気がついた時に取り乱していた。あれは、照れてたんだ。

そうだったんだ、と僕は一人納得して心の中で頷く。あれ？　けど、そうだとしたら　なんで恥ずかしいのにわざわざ僕の腕を掴んだりしたんだろうか。

朝は、怒っていて冷静じゃなくなっていたから考えるまでもない。でも、今は冷静になっている。

あ、でも、僕の腕を掴むときはそこまで冷静じゃなかったような気がする。じゃあ、さっき優希ちゃんが僕をここまで引つ張った理由を言ったときに得意そうに言ったのは照れ隠しなんだろうか。

うーん、よくわからない。無意識だったにしろ、なんでわざわざ僕の腕を掴んだりしたんだろうか。

なんだか、わかりそうな気もしてきたけど、結局、わからない。優希ちゃんに聞いてみようと思ったけど、恥ずかしがるってことは聞かれたくないことだと思うから、やめておいた。

まあ、わざわざわかる必要もないか。気になるけど、困ることはないし。

そういうわけで、優希ちゃんが僕の腕を掴んだ理由について考えるのをやめることにした。

「広也、わたしはもう戻るね」

「あ、うん。気をつけてね」

「大丈夫だよ。わたしは幽霊だから、危ないことなんてないよ」

優希ちゃんは僕の方に笑顔を浮かべてから背を向けた。昨日とは違ってゆっくりとした速度で離れていく。

僕は優希ちゃんの後ろ姿を見送る。少し寂しそうな、後ろ姿を。

「優希ちゃん！」

気がつくと、僕は彼女の名前を呼んでいた。

優希ちゃんが振り向く。不思議そうな顔をしているのがここからでも見える。

「寂しくなったり、一人でいるのが嫌になったりしたら、遠慮なく僕の所に来ていいからね！」

優希ちゃんは驚いてるようだった。確かに、いきなりこんなことを言われたら驚くかもしれない。

あ、そうだ。もうひとつ、言っておこう。

「あと、僕は優希ちゃんと一緒にいて楽しいから、いつでも、優希ちゃんが来るのを待ってるから！」

実は、昨日の夜、優希ちゃんと別れたあと、優希ちゃんのこと気がなっていた。優希ちゃんは一人で寂しくないんだろうか、一人であんな所において心細くないんだろうか、とずっと考えていた。

それは、きつと、さっき優希ちゃんに言ったように、一緒にいて楽しかったからそう考えていたんだと思う。

優希ちゃんの方を見ると、優希ちゃんは顔を俯かせていた。

どうしたんだろうか、と思った直後に優希ちゃんは顔を上げた。

「広也のバカーー!!」

大声でそんなことを言ってきた。正直、そんなことを言われるとへこむ。だけど、優希ちゃんの言葉はそれだけではなかった。

「でも、ありがとう」

僕を罵ったときの声とは違って小さな声だった。だけど、周りが静かだからか、その言葉ははっきりと聞こえた。

「どういたしまして！」

僕がそう言うのと優希ちゃんは反対方向を向いて行ってしまった。

そして、彼女の後姿は見えなくなる。

あ、さっきの優希ちゃんの罵りの言葉は単なる照れ隠しだったんだろうか、と今頃になって気づいた僕だった。

十話

『今日はやめておくわ』

今日は、廃校に行くの？、という問いに対して返ってきたのはそんな言葉だった。

「そっか、じゃあ、今日は僕一人で行くね」

携帯電話を耳にあてたまま僕は窓の外を見てみた。

今日は天気が悪く、朝から雨が降っている。雨によって濡れた窓の向こう側には雨に濡らされた世界が広がっている。

『ええ、そうしてちょうだい。……あと、広也、二人つきりになれるんだから頑張るのよ』

何故か携帯電話の向こう側の夕佳の声が楽しそうな色を帯びる。

「うん？言われなくても頑張るつもりだよ。早く、優希ちゃんが忘れていることを思い出させてあげたいからね」

『そうじゃないでしょ！二人つきりと言ったら別にすることがあるでしょ？』

「そうだっけ？……ないと思うんだけど」

夕佳の言葉に僕は首を傾げる。

『はあ、広也はなんにもわかってないわね。優希ちゃんが可哀想だわ』

「可哀想？優希ちゃんが？どうして？」

『そんなこと、自分で察してよ。まあ、広也はかなり鈍そうだから気付かないでしょうけど』

夕佳の声は呆れているようだった。

「……？夕佳が何を言いたいのかよくわかんないけど、早めに優希ちゃんの所に行ってあげたいからそろそろ、電話切るね」

『あらあら？実は結構、脈ありだったりするのかしら』

「夕佳？何言ってるの？」

『あゝ、いやいや、別に気にしなくてもいいわよ。ちょっと、独り

言みたいなものだし。じゃあ、広也。ちゃんと、優希ちゃんの傍にいてあげるのよ」

「うん、わかってるよ。それじゃあね、夕佳」

そう言つて、僕は通話を切った。静かになった部屋の中、雨の降る音だけが聞こえてくる。

あ、そうだ。カッパ、出してこないと。森の中に入らないといけないから、傘なんて使えないだろうし。

僕は準備をするために立ち上った。

「広也、来るのが遅いよ！」

廃校の中に入った途端に優希ちゃんに怒鳴られた。

「ご、ごめん。雨でぬかるんだ山道つて結構、歩きにくかったから時間がかかったんだ」

とつさに、僕は謝っていた。

「うわー、それに靴、どろどろだよ」

「ああ、うん、そうだね。僕は気にしないからいいけど、優希ちゃんはこのうの見てて気になる？」

そう言いながら、僕は雨で濡れたカッパを脱いでビニールの袋の中に畳んで入れる。

「わたしは、そんなに気にしないけど、広也はそんなの履いてて気持ち悪くないの？」

「ちよつとは気持ち悪いけど、ここつて靴脱いで歩くには危ないから我慢するよ」

僕は自分が濡らした床を見ながら言つた。

ここの床は古くて荒れているから、荒れた部分が足の裏に刺さつてしまいそうだった。

「確かにそうだね。……じゃあ、広也は頑張つて我慢してね」

何故だか笑顔と一緒にそう言われた。からかつてるんだろうか。でも、いつもの意地悪そうな感じはしないから違うかもしれない。

まあ、そんなことどうでもいいや。今までも気にしてなかったんだから、今回もあんまり気にしないでおう。

「それで、今日はどこから探してみるの？」

優希ちゃんにそう聞いた。

実は、昨日の夜、一人で僕なりに考えてみて、気になる場所があったけど、まずは、優希ちゃんが探したい、という場所を探したかった。

「え？うーん。昨日の音楽室、かな？昨日見てみたかぎり、あそこが一番気になった場所だったし……」

どうやら、優希ちゃんが見てみたい、という場所は僕が気になったものがある場所と同じようだ。

だけど、優希ちゃんは音楽室のどこが気になる、というのではないようだ。ただ、漠然とその場所が気になっている、という感じだった。

まあ、僕も似たようなものか。僕だってなんとなくあるものが気になるってだけで、確信的なものは何一つない。

あるのは、あそこが気になる、という疑問だけ。

でも、なんにしる、行かなくては何も始まらない。

「じゃあ、音楽室から行ってみようか」

「何もなかったらどうするの？」

「それは、その時になって考えるよ」

ようは、見つからなかったらどうしようもないって、ことなんだけど。

「それって、ようは何も見つけれなかったら手詰まり、ってことだよ」

そんなことを思ってたなら、優希ちゃんが僕が思っていたことと同じようなことを言った。

「……うん、まあ、そういうことなんだけどね。まあ、今、考えても仕方ないってことだよ。とりあえず、今はやれそうなことがあるんだからそれをしないと」

「広也って結構、考え方が適当なときがあるよね」

優希ちゃんが言ってることは僕も自覚していることだ。だけど、

「考えすぎて前に進めないよりはいいでしょ？」

「あつ、だから広也は道に迷ってこんなところに来ちゃったんだ」

自分の信条みたいなことを言っただつもりだったのに、結果的に墓穴を掘ることになってしまった。

「……よしっ、優希ちゃん、早く音楽室に行こう」

時間が経った今となっては思い出すのが恥ずかしいので誤魔化すようにそう言った。だけど、勘の鋭い優希ちゃんは僕が誤魔化そうとしているのに気がついた。

「広也、誤魔化したって無駄だよ。っていうか、そんなにあからさまに誤魔化されたら逆にいろんなこと、言いたくなっちゃうな」
優希ちゃんが意地悪な笑みを浮かべる。僕にとっては不吉な予感を抱かせるものだった。

そして、その予感はあるがち間違ったものではなかった。

十一話

さんざん優希ちゃんにからかわれた後、僕たちは音楽室へと向かった。

外が雨なので、廃校の中は暗くなっていた。けど、見えない、ということはなかったので難なくたどり着くことが出来た。

「優希ちゃん、やっぱり、ここに来ると気になるものがある？」

部屋に入った途端に優希ちゃんは虚空をぼーっ、と見つめていたから、声をかける。

「……うん。それに、昨日はよくわかんなかったけど、今日はなんだか懐かしいような感じがするんだ」

「そうなんだ。……やっぱり、ここには優希ちゃんに関する何かがあるんだろうね。よし、じゃあ、探そうか」

うん、と優希ちゃんは一度だけ頷いた。それを確認した僕は昨日の夜、調べよう、と思っていたものの方へと近づく。

それは、何も飾られていない額縁だ。僕はそれへと手を伸ばそうとした。そうしたら、視界の端から誰かの腕が伸びてきた。

「え？」

二人分の疑問の声が重なった。僕は腕の伸びてきた方を見ている。優希ちゃんと視線が合った。驚いているようだった。それはたぶん、僕も同じだと思う。

「優希ちゃんもこれが気になってたんだ」

僕はここまで真っ直ぐに来た。だから、額縁へと手を伸ばすタイミングが重なるには僕と同じように初めからそれを調べてみよう、と決めていなければいけない。だから、優希ちゃんも僕と同じように額縁を調べようとしていたんだと思った。

「うん、昨日はこれの裏側を調べてなかったなあ、って思ったから今日、調べてみようと思ったんだ」

「僕と同じだね。僕も昨日の夜、そのことに気がついて調べてみよ

うと思っただよ」

「えっ！わたしも、昨日の夜にそう思っただよ」

優希ちゃんは僕の発言に驚き、僕は優希ちゃんの発言に驚いていた。

「もしかしたら、夕佳の言っただ魂の形が似てる、ってこういうことなのかもしれないね」

考えること、思い浮かぶ時間、それがシンクロするような存在。

それが、魂の形が似た者同士の特別な関係なんだと思う。

「そうかな？単なる偶然かもしれないよ？」

「確かに、そうかもしれないけど、でも、どう言ったらいいのかわかんないけど、そうやって偶然、って言葉で片付けるよりはいいと思わない？僕だけが優希ちゃんと関われる理由がそこにあるような感じがして。でも、夕佳も優希ちゃんと関われるか……。あ、でも、靈感がある夕佳は例外ってことになるのかな？」

途中で何を言いたいのかわからなくなってきた。でも、伝えたいことはきっちり伝わっていたようだ。

「うん、そうだね。わたしと、広也には、特別な関係が、あるんだよね」

恥ずかしいのか言葉が不自然なところで途切れていて、頬が微かに赤くなっていた。かくいう僕も普段は言わないことを言っただけで恥ずかしかったりする。

「そう思うと、僕は最後まで優希ちゃんの手伝いをしてあげたいよ」「じゃあ、そういうなら、広也のことすっごくこき使っちゃおうかな。毎日疲れ果てて動けなくなるくらいに」

冗談なんだか本気なんだかよくわからないような表情で言った。

「ま、まあ、別にこき使われるのはいいけど、ほどほどにしてね」
優希ちゃんのためになるというのなら彼女にこき使われても悪い気はしないような気がした。さすがに、限度はあるけど。

「どうしよっかな」

からかうような口調。たぶん、優希ちゃんはそこまで僕をこき使

うつもりはないのかもしれない。でも、苦笑が浮かぶのは抑えられなかった。

「まあ、そんなことよりも、早く調べてみようよ。わたし、額縁まで手が届かないからさ」

うん？、と疑問に思っ隣を見てみた。

優希ちゃんがいいつもと違っ浮かんでいるのではなくて床に足をつけているのに気がついた。

「なんで、優希ちゃんは浮かんでないの？浮かべば手、届くんじやないの？」

「あれ？広也、わたしがものに触れないっことに気がついてなかったの？」

そう言っ優希ちゃんは地面から足を離して浮かび上がり額縁の方へと手を伸ばした。伸ばされた優希ちゃんの腕は額縁をすり抜けてそれに触れることは出来なかった。

そういえば、初めて会ったとき優希ちゃんは上から出てきたし、山の中を歩いてるときも木の枝が優希ちゃんの体をすり抜けてたと思う。

優希ちゃんは腕を降ろして、もう一度、床に足をつけた。

「でもね、こうやって床に足をつけると、ちゃんと触れるようになるんだよ」

額縁の方へと伸ばされた優希ちゃんの手は額縁から数センチ下の所に触れた。残念ながら優希ちゃん自身が言ったとおりあそこまで手が届かないようだ。

そして、改めて優希ちゃんを見てみて気がついた。優希ちゃん、っ結構、小柄なんだな、と。僕の頭一つ分のさらにもう一回りくらい小さい。いつも、浮かんで僕の横にいたから気がつかなかった。「広也、なんか失礼なこと考えてるでしょ」

じとーっ、とした目で優希ちゃんがこちらのことを見ていた。

「う、ううん、そんなことないよ」

僕は慌てて否定した。優希ちゃんのことだから、僕が小柄だと思

つていたことを知ったら怒りだすと思う。

「それ、嘘でしょ？ 広也、絶対に失礼なこと考えてたよ。……たとえば、わたしの身長のことか」

やっぱり、優希ちゃんは勘が鋭くて的確に僕が考えていたことを言い当てた。

「……ごめん、優希ちゃん。実はその通り」

このまま隠し通すのは無理だと悟った僕は正直に言って謝ることにした。

「うー、やっぱり。わたし、身長のことには気にしてるんだよ！」

そう言って、優希ちゃんはそっぽを向いてしまう。この歳で死んでなかったらもっと大きくなってたはずなのに……！、と小さな声で言っていた。

「あの、優希ちゃん。ちっちゃかったらさ、その、可愛いと思うよ」

って、僕はなに恥ずかしいことを言ってるんだろうか。でも、フオローにはなったと思う。きっと、たぶん……。

「え？」

優希ちゃんは怒っているのとは違う感じで頬を赤く染めながらこちらを振り向いた。

「もしかして、広也はちっちゃい女の子の方が好き、なの？」

「え？ いや、別にそういう訳じゃないけど」

「じゃ、じゃあ、広也はどんな、女の子が、好みなの？」

僕は優希ちゃんのいきなりの問いに困惑してしまふ。なんで、そんなことを聞いてくるんだろう、と思うと同時にとても答えにくい質問だな、と思っていた。

今までそういうことに興味を持ってこなかったから好み、を聞かれても、ないとしたか答えようがない。だけど、優希ちゃんは僕の答えに何かを期待しているようで、僕の答えはそれを裏切ってしまうような気がした。

考える。どうすればいいのか、ということ頑張って考える。

本当になんで僕にそんな質問をしてくるんだろうか。それも、並

行して考えてみたけど結局わからなかった。

このまま沈黙していたら不自然に思われてしまう。だから、仕方がないので僕は思っているままのことを言った。

「そういうことに興味がないから、好み、って言われても答えようがないんだよね」

「そう、なんだ……。じゃ、じゃあさ！わたしのことは、どう思ってるの……？」

顔を俯かせながら聞いてきた。

優希ちゃんの聞きたいことは、女の子として、という意味だろうか。ここまでの会話の流れからしてそれ以外は考えにくい。

「……」

「……」

何とも微妙な沈黙が流れる。優希ちゃんは顔を俯かせているだけで、それ以上は何も言っていない。

本当に、なんで、優希ちゃんはそのようなことを聞いてくるんだろうか。もしかしたら、という思いもあるけど、それはないだろうな、という思いの方が強い。

とりあえず、何と答えてもどうにかなるだろう、と僕は楽観的に考えて、

「どっちか、っていわれると、好きだよ、優希ちゃんのこと」

正直に言ってみたらかなり恥ずかしかった。今さらだけど、異性に好きななんて軽々しく言うもんじゃないな、と思ってしまう。

「え……。そ、それって本当っ？」

優希ちゃんが顔を上げる。その顔は真っ赤になっていた。

「う、うん。こ、こんなときに嘘を言っても仕方ないと思うんだけど」

僕は僕で優希ちゃんの顔を直視できなくて視線が泳いでしまっている。

優希ちゃんは僕の答えを聞いたからか、また下を向いてしまう。

僕はそんな優希ちゃんから目をそらしてしまう。

「……」

また、微妙な沈黙が流れる。いや、今回はさっきと違ってかなり気まずい。

な、何か言わないと……っ！

そう思うけど、軽く混乱している今の僕の頭ではどうやればこの状態を脱することができるのか、わからない。

当てもなくあちこちに視線を彷徨わせる。

視線が右に、左に、と動く。その間に、雨が屋根や地面をたたく音が耳に入ってくる。

そして、やっと見つけた。この沈黙をどうにかするためのものを。

「優希ちゃん」

「広也」

不運にも二人分の声が重なってしまう。今の状態でそんなことになってしまうと、とても先を続けにくい。

「あの、優希ちゃん、先に、言っていていいよ」

「う、ううん、広也からでもいいよ」

いや、優希ちゃんから、と言おうとして止めた。このまま譲り合っ
つていてもらちが明かない。

「じゃあ、僕から言わせてもらおうよ。早く、あの額縁を調べてみようか。……僕が言いたいのはこれだけだけど、優希ちゃんは？」

「え、えと、わたしも同じこと、言おうとしてただけだ」

「あれ？そうだったんだ」

「うん……」

それから、何故か僕たちはまた沈黙しそうになる。そうならないようにしたのは僕自身だった。

「じゃ、じゃあ！早く見てみようか！」

緊張から不自然に大きな声を出してしまう。僕は何を緊張しているというんだろうか。

「う、うん。そ、そうだよ。ひ、広也、お願い！」

僕は焦ったような優希ちゃんの言葉に頷いて額縁の方へと手を伸ばす。本来しようとしていたことをするまでに結構時間がかかってしまった。

だけど、これをするまでに時間がかかった割に額縁は拍子抜けするくらい簡単に外れた。

僕はそれを手元まで引き寄せる。優希ちゃんはとても気になるのか浮かび上がって僕の手許を覗き込んでくる。

僕は、先ほどとは違う緊張を持って額縁を裏返そうとする。優希ちゃんも固唾をのんで額縁を見つめる。

これで、何もなかったら拍子抜けだ。笑うか、落胆するか、どっちかだと思う。

だけど、もし、何か——優希ちゃんに関するものがあつたら僕たちはどうするんだろうか。想像はできない。優希ちゃんがどうするか、ということに関しては特に。

だからといって、このまま考えているわけにはいかない。もうここまで来てしまったら引き返すことはできないから。

そう思っ、僕は額縁をゆっくりと裏返した。

そこには、相合傘が書いてあり二人分の名前が書いてあつた。右には直安、とあり、左には恵子、とあつた。この廃校がまだ学校として機能していた時にいた生徒が書いたものなんだろうか。僕はこれを見て特別な感情などは抱かなかつた。そう、少なくとも僕は。

だけど、優希ちゃんは違った。優希ちゃんは幽霊だから息をしていないけど、感覚としてそういうことをしていた、というのを覚えているのかもしれない。驚きからか、優希ちゃんが息をのむ音がはっきりと聞こえたような気がした。

「これ、お父さんとお母さんの名前だ……」

そして呟くような小さな声でそんなことを言つた。こうして、優希ちゃんが覗き込んでいなかったら聞こえていなかったであろう言葉に僕は驚きを隠せない。

「それって、本当のこと？」

確認を取るように僕はそう聞く。だけど、どこかで優希ちゃんが言ったことは本当なんだとすでに納得している。

優希ちゃんが気になる、と言ったこの部屋で見つけた僕と優希ちゃんが同時に調べようとした額縁の裏側。それが、裏付けようのない証拠のようになっていた。

「うん、間違い、ない、よ……」

頷き、少しずつ、声が震えていく。優希ちゃん？、と名前を呼ぼうとした瞬間。

「おとう、さん……おかあ、さあん………」

そして、突然、優希ちゃんは大声で泣き始めた。いきなりのことに僕は狼狽してしまう。

「優希ちゃん？……優希ちゃん！」

混乱しながらも何回か優希ちゃんの名前を呼ぶ。だけど、一向に優希ちゃんは落ち着きそうになかった。

彼女は、大声で泣きながら何度も、何度も、お父さん、お母さん、と言っている。まるで、親とはぐれて途方にくれて泣いている子供のような。だけど、そこにあるのは不安ではなくて悲しさ。

彼女は両親に関して何かあったのだろうか。泣き叫びなくなるほどに悲しい何かが……。

僕は優希ちゃんの様子を見ていられなかった。何か、何かをしてあげないと。

そう思っていたら、気がつけば僕は彼女のことを抱きしめていた。そのときに、僕は額縁から、手を放していた。額縁は重力に逆らうことなく地面に落ち、大きな音を立てた。だけど、それは彼女の泣き声によってかき消されてしまう。

僕は彼女を強く抱きしめていない。僕にそんな権利はないから。優しい言葉をかけることはできない。何を言えいいのかわからないから。

それでも、彼女は僕に抱きついてきた。強く強く、何でもいいから何かにすがりつくように。

僕はただ、されるがままになっていた。彼女が突然泣き出したことに困惑しながら、彼女に対して何もできない自分に苛立ちを抱いて……。

十二話

「お父さん……。お母さん……」

優希ちゃんは嗚咽混じりにそう呟く。今の彼女はまるで小さな子供のようだった。十歳とかそれくらいの本当に小さな子供のようだった。

本当に、本当に弱々しく見える。このまま僕が少しでも動いたら壊れてしまうんじゃないだろうか、と思うくらいに。

だから、僕は動くことができない。僕にすがりつくように弱く抱きついたままの彼女を弱く、けど、できるだけ優しく抱きしめたまま。

静かな、静かな、本当に静かな雰囲気がこの場を覆う。雨の音も、優希ちゃんが嗚咽を漏らす声も、全てが静かな雰囲気の一部となっていた。

音はするのに、静かだ。痛いくらいに、悲しく、静かだ。

この静けさは彼女の記憶の一部なんだと感じた。大きすぎて、受け入れがたくて、漏れ出てしまった悲しい記憶の一部。思いだすのが辛いのであろう記憶。

僕が彼女にしたことは間違っていたんだろうか。こんなことになるのなら、記憶を取り戻さない方がよかったんじゃないのだろうか。そんな、否定的な考えが頭の中を巡る。後悔と自己嫌悪。それが、今、僕の中にある感情。

「……わたしのお父さんと、お母さん、わたしが死ぬ一週間前に死んじゃってたんだ」

傍から聞けば落ち着いている声。けど、こうして抱きしめているとわかる。今、彼女は震えている。

たぶん、黙っていられなかったんだと思う。黙っていたら、また、泣き出してしまいそうだったんだと思う。

それに対して僕は頷くだけ。それだけのことしかできない。今か

ら彼女が語るのは悲しい記憶。僕は何を言ってあげれば、してあげればいいというんだろうか。いや、それ以前に何かをすべきなのか、言うべきなのか、それ自体もわからない。

「その日は、二人の結婚記念日、だったんだ。だからね、その前の日に二人だけで行きたい所に行ってきたら？、ってわたしは二人に言ったんだ。そのときは、わたしも連れていく、って言うててたんだよ。結婚記念日なんだから二人で行かないと意味ないよ、ってわたしは何度も言うて……」

言葉が途切れる。それから、一度、涙をすすする。死んでしまった両親のことを思い出すのは辛いんだろうか、苦しいんだろうか。両親ともに元気な僕には想像することができない。だけど、思い出すだけで悲しい気持ちになるんだろう、ということくらいは予想することができた。

だから、優希ちゃんの少し明るい声が痛々しかった。悲しさを無理やり抑えているようで、苦しさを隠して見えないところで更に痛がっているようで……見て、いらなかった。

本当にどうして僕はこんなにも無力なんだろうか。そう思うと、自然と彼女を抱く腕に力が入った。

そして、また、彼女がまた口を開く。

「それで、やつとお父さんと、お母さんは二人で行くって言ったんだ。それで、結婚記念日になってお父さんと、お母さんが出発する時、わたしはそれを見送ってたんだ。その時はわたしを残していくってことをすごく心配してたなあ。二人ともね、すっごい親バカだったんだよ。だからね、わたし結構苦労したんだ。二人ともわたしのことばかり考えてるからね。……だけど、楽しかったし、幸せだったんだ。あのときは、そうは思ってたけどね。けど……」

今までどこか明るい声で話していた。だけど、その声も途端に暗いものになった。

「その日、二人は事故で、死んじゃったんだ……。居眠り運転をし

てたトラックが突っ込んできて、即死、だったんだって」

間が開く。その続きの声に感情はこもってなかった。

「ねえ、これって、わたしの、せいなのかな？わたしが、何も言わなかったら、二人は、まだ生きてたのかな？」

「そんなこと、ないよ……」

気がつけば僕は小さな声でそう言っていた。感情のこもらない声で自分を否定する優希ちゃんを見ていらなかった。

「優希ちゃんはお父さんとお母さんのことを思っただけで、そう言っただけでしょ？だから、優希ちゃんは何も、悪くないよ」

「そう、なの、かな……？」

弱々しい優希ちゃんの声。

「そうだよ。優希ちゃんが自分を責める必要なんてどこにもないよ」
自然と優希ちゃんを抱く腕に力が入った。

「ひろ、や……」

彼女が泣きそうな声で、僕の名前を呼んだ。

「優希ちゃん。どうしても自分が許せないっていうんなら、僕が許してあげるよ。それは、優希ちゃんが背負ってるべきものじゃないよ」

「広也、そんなこと、言わないでよ……。そんなこと言われたら、わたし、どうしていいかわかんなくなるよ」

優希ちゃんは僕に抱きしめられたまま首を左右に振って答える。

「別に、何をしたっていいよ。怒ってもいいし、笑ってもいいし……泣いてもいいし。好きなようにしてよ。ただ、自分のことを責めないようにしてくれればそれでいいよ」

僕はそう言う。僕なんかがこんなことを言っても重みなんてどこにもない。聞き流そうと思われれば簡単に聞き流されてしまうようなそれくらいの重みしかないんだと思う。それでも、言うだけは言っておきたかった。

「広也……」

彼女がまた僕の名前を呼ぶ。

「広也、ひろ、やあ……」

泣きながら優希ちゃんに強く抱きついてきた。今度はすがりつくのではなく、体を預けるようにして。

僕は彼女の意外な反応に驚いてしまい、彼女の泣き声を聞きながら固まってしまう。正直に言って、ここまで大きな反応を返されるとは思ってもしなかった。

だけど、狼狽している場合じゃない。彼女は僕のことを必要としてくれてるんだ。だから、その期待に答えるために僕は僕に出来ることをしてあげないといけない。

本当に何をすればいいのかわからない。だから、彼女が僕に強く抱きついてきたように僕も彼女を強く、抱き締める。それから、頭を撫でてみる。優しく、壊れものに触れるように。今まで人の頭を撫でたことなんてなかった。こんな撫で方でいいのかわかるかわからない。そして、安心させるための言葉。大丈夫、大丈夫、だよ、と何度も何度も続ける。

これくらいで、安心してくれればいい、と思いながら。

十三話

「あはは、広也には恥ずかしいところ、見せちゃったね」

やっと落ち着いた優希ちゃんには僕から少し離れた場所に浮かんで恥ずかしそうに笑った。

僕はそんな優希ちゃんの姿にどきり、としてしまった。

「……？広也、どうしたの？」

いつの間にか僕は優希ちゃんの顔を見つめてしまっていたらしい。不思議そうに僕の顔を見ている。

「な、なんでもないよ」

慌てて、僕は顔をそらす。だけど、こんなことをするのは不自然だと思い、優希ちゃんの方へと顔を戻す。

と、そこで、優希ちゃんの目元にまだ涙が残っていることに気がついた。というか、よくよく見てみると、顔全体が涙で濡れていた。僕はポケットの中からハンカチを取り出して、優希ちゃんへと近づく。

「優希ちゃん、顔が涙で濡れてるから拭いてあげるよ」

と、僕は言った。最初はハンカチを優希ちゃんに渡そうと思ったんだけど、よく考えたら優希ちゃんには触れないんだった。かと言って、僕が持っていたからといって優希ちゃんがそれに触れることができるのかどうかはわからない。少なくとも服には触れているみたいだけど、手に持っているものは、どうなるのかわからない。なので、試してみることにする。

その時優希ちゃんが、え？、と小さく言っていたような気がしたけど、気にせずに優希ちゃんの顔を拭こうと万が一のことも考えてゆっくりと頬へと手を伸ばす。

「ひゃっ！」

優希ちゃんがそんな小さな悲鳴を上げた。どうやら、ハンカチは優希ちゃんをすり抜けてしまったようだ。僕の指に優希ちゃんの頬

の柔らかい感触がある。

「ひ、広也！い、いきなりなにをするのっ！」

怒っているような、恥ずかしがっているような声。それに対して、僕は、

「ご、ごめん優希ちゃん。そ、その、ハンカチがすり抜けるとは、思わなかったから」

慌てて、優希ちゃんの頬から手を離れた。何となく予想していたといっても、実際に触れてしまうと、結構びっくりした。

「う、うん。べ、別にわざわざ謝らなくても、いいよ」

何故だか、優希ちゃんも取り乱しているようだった。視線に落ち着きがなく全然関係ないところを見ている。

「あ、ありがとう？」

そして、何故かお礼を言うてしまう僕。

僕と優希ちゃんの間にある雰囲気が妙だった。なんていうか、冷静になれない。もし、冷静になれたとしても、すぐに冷静さが壊れてしまう。

そんな、今まで感じたことのないような雰囲気だった。

「あの、優希ちゃんさ。顔、拭いた方がいいと思うんだけど、どうしようか」

また、同じようなことを言う。だけど、黙っているよりはましだ。黙っただけはこの雰囲気には耐えられない。

「あ、大丈夫だよ。わたし、ハンカチは持ってるから」

そう言つと、優希ちゃんはポケットから女性っぽいハンカチを取り出して、それで、顔を拭き始めた。

どうやら、僕がわざわざ優希ちゃんの拭く必要はなかったようだ。あのハンカチは優希ちゃんが死ぬ前に持っていたものなんだろうか。まあ、そうじゃないと、優希ちゃんがあれに触れる理由が説明できないけど。そんなことを思いながら僕は顔を拭く優希ちゃんを眺めている。

「……このハンカチはね、お母さんのものだったんだ」

顔を拭き終えて、奇麗にハンカチを折り畳みながら言う。その声には悲しさとともに懐かしさがあった。

これから、優希ちゃんが言うことは過去についてだ。さつきみたいな辛い過去ではなく、幸せな、だけど今となつては悲しい過去。「これ、お母さんの一番のお気に入りだったんだって。お父さんと付き合い始めたとき、誕生日にお父さんからもらったものなんだって。十七年くらい前のものなのにこんなに綺麗なんだよ」

優希ちゃんは自慢の宝物を見せるかのような笑顔を浮かべながらさきほど涙を拭いたハンカチを見せてくれる。

言われたとおり確かにそのハンカチはとても綺麗だった。もしかしたら、ほとんど使っていなかったのかもしれない。ときどき取り出して、そして、昔を思い出す。それだけ、だったのかもしれない。ハンカチとしてはあまり嬉しくないことだと思うけど、渡した優希ちゃんのお父さんにとっては嬉しいことかもしれない。

「それとね、これがわたしのお父さんが大切にしていたものなんだ」
優希ちゃんがポケットから取り出したのは銀色のライターだった。ライターの良し悪しとかはわからない。だけど、そのライターに施された花の彫刻は手の込んだものだわかる。

「これはね、お父さんがお母さんにハンカチをあげた時と同じ年の誕生日にお母さんがお父さんにあげたものなんだって。こういう柄をしてるから、お父さん、これをもらったときはあんまりいい反応をしなかったんだって」

　　楽しそうな笑顔を浮かべる。

「ただどね、使っていくうちに気に入っちゃったんだって。それで、気がつけばお母さんと同じように十七年間も大切に使ってたんだよ。お父さん、これで、よく煙草、吸ってたなあ。わたしは嫌いだったけど、お母さんはお父さんが煙草を吸ってる姿が好きだったんだって」

　　優希ちゃんはハンカチとライターを重ねる。夫婦の絆の強さを物で表すかのように。

「お父さんとお母さん、すつごく仲がよかったんだよ。夫婦、っていうよりもカップルみたいな感じだったかな。二人だけの世界に入っちゃうことが多くてわたしが一人疎外感を感じることはあったけど、でも、わたしがちよつとでも寂しそうな表情をしたら、すぐに気がつくんだよ。わたしが驚くくらい敏感に」

そして、彼女は僕の顔を見つめてきた。もう、涙で濡れてはいないけど、寂しそうな、だけど懐かしさと幸せを浮かべた表情で。

「わたし、思い出したよ。この世で何をしたかったのか」

少し表情を和らげて彼女はそう、言った……。

十四話

「優希ちゃんはこの世で何をするつもりだったの？」

この世で何をするつもりだったのか、ということ思い出した優希ちゃんに聞く。黙っていても答えてくれそうな気がしたけど、出来るだけ、早く聞きたいと思っていた。

「簡単だよ。お父さんとお母さんの思い出の場所に行くつもり、だったんだ」

「思い出の場所？」

オウム返しのようにそう言ってしまう。

「うん、この山の上の方にね、二人の思い出の場所があるらしいんだ」

「へえ……。どんな場所なの？」

「それは、今は秘密だよ。行ってからのお楽しみだよ」

あれ？なんだか優希ちゃんの声が今まで聞いた中で一番明るかったような気がする。なんだろう？まあ、いつか。

「上の方にあるんなら、今日は雨が降ってるからやめておいた方がいいね。……って、優希ちゃんには関係ないか」

そう、優希ちゃんは幽霊だ。だから、雨で濡れることはない。だけど、生身の人間である僕は違う。雨には濡れる。だから、カッパを着ないといけないし、そうしてカッパを着た場合は非常に歩きにくい。

だけど、優希ちゃんが濡れないというのなら今すぐ行ってあげたような気がする。いや、優希ちゃんが一人で行ってもいいのかもしれない。むしろ、優希ちゃんが一人で行くべきなのかもしれない。この先は優希ちゃんの家族だけが関わることだ。僕がいくべきじゃない。

「確かにそうだね。だけど、わたしは晴れてから行きたいな」

考え事をしていたら優希ちゃんが僕の言ったことに言葉を返して

くれていた。

「どうして？ 優希ちゃんなら雨に濡れることもないし、歩みにくいなんてこともないから今すぐ行ってもいい気がするんだけど」

「わかってないなあ、広也は。思い入れのある場所こそが一番綺麗に見えるときに合わせて行くべきなんだよ。……それに、広也にもついてきてほしいから、出来るだけ歩きやすい日がいいんだ」

少し恥ずかしそうに言った。そっか、優希ちゃんは僕にいてほしいんだ。なら、優希ちゃんが一人で行けばいいよ、なんて言えるはずがない。

「じゃあ、今すぐ晴れますように、って二人で祈ってみようか」

だから、僕はそう答えてた。祈ったくらいで天候が左右されるとは思わないけど、ただ、なんとなく優希ちゃんとそうしたら楽しいかな、と思えた。そして、もしかしたら、想いもきつと届くんじゃないんだろって。

「そんなので晴れると思わないんだけど」

意外と優希ちゃんは現実主義者だった。まあ、確かに祈ったくらいで思うようになるんなら、この世に悲しんだり、苦しんでる人なんかいないよね。

「それじゃあ、どうするの？ 今日にはもうすることがないよ？ まだ、この廃校の中で何か探してみる？」

「やだよ、わたしはずっとここにいるんだからもう今さら見るところなんてないよ。ここみたいな特別なところ以外はね」

「それって、ここでなにかを探してみたいってこと？」

思ったままに言ってみた。だけど、言ってみてからなんとなくそれは違うような気がした。なにが、というのはわからないけど、漠然とそう思った。

「うつん、違うよ。……ただ、ここにいらればいいんだ。ここは、懐かしい感じがするから、ここにいと落ちつけられるんだ」

優希ちゃんは床に足をつけて、僕が落とした額縁にハンカチとライターを置く。それから、かがみこんでそれを持ち上げた。

こうして、優希ちゃんのお父さんが大切にしていたもの、お母さんが大切にしていたもの、そして、二人の絆を現したものがひとつになった。

「そっか、じゃあ、今日はずっとここにしようか」

まだまだ雨は上がりそうにない。

「うん。広也は、いてくれるよね」

今日の雨は何故だか優しいような気がした。

「当たり前だよ。どうせこのまま帰っても優希ちゃんのことを気に
なつてそうだし」

でも、雨の音はどこか悲しさを帯びているような気がして、

「そ、それって、どういう、意味？」

だからか、この雨は優希ちゃんの今の気持ちを表しているような
気がする。

「え？どういう意味って、言われても、その言葉のまんまの意味な
んだけど」

悲しい記憶を取り戻して、泣いて、

「そっ、なんだ……」

幸せだった時のことを思い出して、笑っている——

「……？」

——今、僕の前にいる一人の少女の心を表しているような、そ
んな気がした。

十五話

カナカナカナカナ……

ふと、小さくヒグラシの鳴き声が聞こえてきた。ゆっくり、と瞼を開く。

と、瞼を開いたその先には夕陽で顔を赤く染めた優希ちゃんの顔が間近にあった。

「……」

「……」

しばしの間、僕たちは見つめあうことになる。結構、近くで見ているからわかるんだけど、優希ちゃんは今完全に停止してしまっているみたいだった。瞬きはしないし、頬は動いていないし、瞳さえも動いていない。

「優希ちゃん？」

少し心配になって声をかける。

「え？あ、わ、お、驚かさないでよ、広也！」

慌てたように離れていった。

対して、僕はそれを追いかけるようにゆっくりと体を起こす。寝起きでぼんやりする頭のままで優希ちゃんの方を見る。視線をそらされた。

どうしたんだろう、優希ちゃんは、と思いながら僕は立ち上がる。変なところで寝たせいか体の節々が痛い。

「お、おはよう、広也」

不自然に視線をそらしながら近づいてきた。

「おはよう、って言えるような時間じゃないと思うけど……。でも、一応、おはよう」

優希ちゃんの態度が気になったけど、それに関しては何も言わないでおいた。

そのかわりに、眠っている間に固まってしまった体をほぐすよう

に伸びをする。寝起きにこうすると結構、気持ちがいい。

それから、欠伸が出そうになったのでそれを噛み殺す。

僕が寝始めたのはいつだろうか。時計を見ていないので正確にはわからないけど、お昼御飯を食べてから寝始めるまでに一時間か二時間くらいしか経ってなかったように思うから結構な時間、眠ったことになる。

結局、あのあとは何もすることがなくて暇、だったんだよね。だらだらと、優希ちゃんとかくだらないことばかり話していたけど、ふとした沈黙が起きた。

どうしたんだろう、と思って優希ちゃんの方を見てみると優希ちゃんが眠っていた。

幽霊も眠るんだ、と意外に思いながらその寝顔を眺めていたら眠気に襲われた。そして、眠気には抗えなくて眠ってしまった。

「僕たちが寝てる間に雨、上がったみたいだね」

「そんなこと知ってるよ。わたしのほうが早く起きてたんだよ」

「そっか、それもそうだよね。……どうする？ 優希ちゃんの両親の思い出の場所には行ってみる？」

「今日はもう、行かないよ。わたし、言ったでしょ？ 思い入れのある場所は——」

「——そこが一番綺麗に見えるときに合わせて行くべき、だよね」途中で優希ちゃんの言葉を取って微笑みを浮かべながらそう言った。

そう、僕はわかっていたんだ。優希ちゃんがこう言うだろう、って。でも、もしかしたら、って思ってたから確認を取るように聞いてみただけだった。

そんな僕を優希ちゃんはなんだか不満そうに見ていた。

「むう、人のセリフ、取らないでよ」

「ごめん、ごめん。優希ちゃんが言ったことってさ、結構いい言葉だったから言ってみたかったんだ」

この言葉に偽りなんかはない。本当にそう思っている。

思い入れのある場所はそこが一番綺麗に見えるときに合わせて行く、理解もできるし、納得もできる。だけど、優希ちゃんがそう言うまでは気がつかなかった。

この考えは、大切な考え方で、それだからこそ、気づきにくいのかも知れない。僕は、そう思った。

「そ、そうかな？わたしはただ、自分が思ったことを言っただけだよ……」

僕から視線をそらして、そう言う。

「そう思えることはすごいと思うよ。僕は優希ちゃんにそう言われるまで気がつかなかったんだしさ。優希ちゃん、って心が奇麗なのかもしれないね」

「——っ」

優希ちゃんが夕陽の光とは関係なく顔を赤く染めた。今日までずっと一緒にいて気がついたけど、優希ちゃんは結構恥ずかしがり屋なようだ。しよっちゅう、顔を赤くしては僕から顔をそらしたりしている。

そういう、素直な反応は見えていて和むことができる。現に今だって、少し和んでしまっている。

まあ、でもこのままだと恥ずかしがっている本人が可哀想だ。

「それじゃあ、僕はそろそろ帰るね。優希ちゃんは、今日もついてきてくれるんでしょ？」

全く関係のない話題を出すことによって恥ずかしさを薄れさせてみようとする。

「え？」

あれ？聞こえてなかったみたいだ。苦笑をしながらもう一度言うことにする。

「だから、僕はそろそろ帰るから、優希ちゃんは今日もついてきてくれるんだよね、って聞いたんだよ」

「あ、そうなんだ。……うん、今日もついてくつもりだよ」

いつもの優希ちゃんの調子で頷いてくれた。やっぱりこういう優

希ちゃんの方が僕としてはとてもやりやすい。変に意識しないですむ。

優希ちゃんが恥ずかしがっていると妙な雰囲気が出来上がってしまい、僕もいつも通りに振るまいにくくなってしまふ。どうしてなんだろうか。そんなことでいつも通りに振るまいにくくなる必要なんてないはずなのに。

いくら考えてみても理由はわからない。こういう場合は考えるのは諦めるべきだ。今は、まだ優希ちゃんと一緒にいる。そのときに会話を途切れさせるのは嫌だから。

「そう、じゃあ、帰ろうか」

優希ちゃんとちよつとしたやり取りをしていた間に日は沈んでしまったようだ。辺り薄暗くなってきた。そして、ここはすぐに真っ暗になってしまふだろう。

「うん、そうだね。真っ暗にならないうちに帰らないと、広也、帰れなくなるもんね」

からかうような笑みを浮かべてそう言った。もうさすがに何度も言われているので慣れている。それに、真っ暗になってしまえば帰れなくなるかもしれない、というのは本当のことだから。

「そうならないためにも早く帰るよ」

「あれ？広也、もう、このことを言われるのに慣れちゃった？」

「うん、さすがにね」

苦笑しながら言う。

「そつか。……それじゃあ、新しく広也をからかうための材料を探さないと」

優希ちゃんはそんなことを呟くように言ったのだった。

十六話

「明日はいよいよ優希ちゃんの目的地に行けるんだよね」

今日の夕日は綺麗だったから、明日は晴れるんだろう、と何の疑いもなく思う事が出来た。だから、自分が思っていたよりも明るい声が出ていた。

「うん、……そう、だね」

けれど、返ってきた言葉はどこか、翳を帯びていた。

「どうしたの？ 優希ちゃん。なんだか、元気ないよ？」

調子が悪いんだろうか、と心配に思っただけで声をかける。このときは幽霊に調子がいい悪いがあるんだろうか、とは露ほども思っていなかった。

「ううん、だ、大丈夫だよ！」

無理やり浮かべた、という感じの笑顔を浮かべて明るい声で言った。声にもどこか不自然さがあつた。

でも、わざわざ隠す、ということは聞かれないことなんだろう。あんまり、そういうことは言及しないほうがいいんだと思う。

「そう？ なら、いいけど、無理はしないでね」

「なに言ってるの？ わたしは幽霊だよ。だから、いくら無理をしても大丈夫なんだよ」

今度は本当に元気な声で言った。

「そうかもしれないけど……。まあ、いいや。優希ちゃんがそう言うなら」

何かを言いたかったけど何を言いたかったのかわからなくなってしまった。けど、僕の心の中では何かが引っ掛かっていた。

少し考えてみるけれど結局、その何か、というのはわからなかった。

「広也」

「うん？ なに？」

優希ちゃんに名前を呼ばれたのでそちらを向く。

「広也、どこに行くつもりなのかな、って思っ。もう、広也の家、過ぎちゃったよ」

え？、と思、僕は後ろを振り返ってみる。そこにはたしかに僕の家があつた。少し考え事をしていた間に通り過ぎてしまつていたようだ。

進行方向を百八十度変えて少し進みすぎた道を戻る。

「広也、どうしたの？なにか考え事でもしてたの？」

「うん、まあ、そうだけど。どうでもいいことだよ」

「ふーん、そうなんだ」

僕がなんのことについて考えていたのか、ということには興味がないみたいだ。

家の前にはすぐについた。

「それじゃあね、優希ちゃん。明日も、今日と同じくらいの時間に優希ちゃんの所に行くよ」

「あ、うん」

優希ちゃんは頷く。だけど、どこか様子がおかしい。

「ね、ねえ、広也」

「うん？」

「あの、えっと……」

何かを言い淀んでいるようだった。僕は優希ちゃんに先を促すように頷く。

「……今日は、広也の、家に、泊めてもらえないかな？」

僕は優希ちゃんの言葉に驚いてすぐに言葉を返せなかった。そのせいで、優希ちゃんは少し勘違いをしてしまったようで、

「あ、嫌だったら、別に、いいんだよ。なんとなく、言ってみただけなんだし」

「嫌なんかじゃないよ。むしろ、歓迎してあげるよ。僕だけ、ただね」

一昨日、僕から誘ったのに、いまさら泊めてあげないなんてこと

は絶対にない。

「でも、どうしたの？突然」

一昨日の様子からして、そんなことは絶対に言わないと思っていただけに意外だった。

「べ、別に広也には関係ないよ」

顔をそらされる。

「いや、優希ちゃんも僕の家に泊まるわけだから少しは関係あると思うよ」

「うっ、確かにそれはそうかも……」

それから優希ちゃんは考え込む。言うべきか言わざるべきか考えているんだと思う。というか、正直、あれくらいの言葉で悩むとは思わなかった。でも、優希ちゃんは結構、素直なところがあるからこれはこれで普通の反応なのかもしれない。

なににせよ、本当は、話してくれても、くれなくてもどっちでもよかった。でも、出来れば優希ちゃんの考えていることを知りたいと思っている。

「……しょうがない、話してあげるよ」

肩をすくめてそう言った。だけど、どこかがいつもの優希ちゃんらしくなかった。

「実はね。不安、なんだ」

そう言った。その声はどこか暗かった。

「理由はわかんないんだけどね。ただ、なんか、こう、はつきりしていないけど不安なんだよ」

曖昧に、言う。ただ、その声は不安で微かに揺れていた。そして、怖がっているとも思った。

心の底ではその不安に気が付いているのか、それとも、不安の正体がわからないことが怖いのか。どちらなのかはわからない。だけど、放っておくわけにはいかない。

彼女が不安だというのなら一緒にいてあげればいい。不安なんていうものは孤独な時の方が大きくなるものなんだと思う。

そして、彼女は少し遠まわしではあるけど、僕と一緒にいてほしいと言った。

だったら、一緒にいてあげればいい。一緒にいて、困ることなんてない。むしろ、こうして、優希ちゃんの役に立てることが嬉しかった。

だけど、その理由はよくわからない。人の役に立てるから、というのは違う感じだった。優希ちゃんの役に立てる、そう思ったときにだけ湧き上がる感情。なんだかわからないけど、不思議な感情。

優希ちゃんが声をあげて泣いた時、僕はこの感情を強く感じた。それから、僕はこの感情を意識し続けている。正体不明のこの感情を。

だけど、今はこんなことを考えている場合じゃない。できるだけ、優希ちゃんの不安を拭ってあげないと。それに、こうして、優希ちゃんに何かをしてあげることと答えに近づいていくような気がする。「そうなんだ。じゃあ、僕は優希ちゃんの不安をできるだけ少なくなるるように努力するよ。そのために、優希ちゃんが望んだように僕の家に泊めてあげる。それに、してほしいことがあったら何でも言つてよ」

何をすればいいのかわからないので言えることは所詮このくらいだった。

だけど、優希ちゃんが望んだことをする、というのは大切だと思う。それで不安がなくなるとは思わないけど、少なくとも紛らわせることくらいはできと思う。

「ひ、広也のくせに……。でも——」

でも、の後は聞き取ることが出来なかった。

「ねえ、今、最後になんて言ったの？」

「な、なんにも言っていないよ。広也のバカ！」

何故か罵られた。

「……優希ちゃん、ってさ、時々かなり不条理なこと言ってくるよね」

「そ、それは……広也がバカだからだよ。バカっ！」

また言われた。しかも、さっきよりも声に力がこもっていた。嫌われてるってわけではなさそうだけど、なんで優希ちゃんはそのことを言うんだろうか。

僕は、何故だか顔を赤くしている優希ちゃんの前で首を傾げた。

そうしたら、また「バカ！」と、言われてしまった。

十七話

狭いとはいえないけど、広いともいえない僕の部屋に僕と優希ちゃんの二人だけがいる。今まで誰かをここに誘ったことはない。だから、この部屋に僕と僕の家族以外が入ったのはこれが初めてだった。

その初めての訪問者である優希ちゃんの感想はというと、「普通の部屋だね」、という簡素で率直なものだった。

まあ、僕自身もそう思ってるから別に何とも思わないんだけどね。それで今、僕は夕飯も食べ終え、お風呂にも入って、布団の上で横になって天井をぼーっ、と眺めている。優希ちゃんは一人になりたい、と言って外に出て行ってしまった。

どうしたんだろうか。何か、考えたいことでもあるんだろうか。彼女が怖がっている曖昧な不安についてとか。

本当に優希ちゃんがそれについて考えているのかはわからないけど、僕は優希ちゃんの抱えている不安について考えてみようと思った。彼女がなんらかの不安を抱えてそれに対して恐怖を抱いている、というのは間違いないだろうから。

でも、一体、恐怖を抱くような不安って？

死ぬこと？何かを失うこと？独りになってしまうこと？

どれも、近いような気がした。そう、彼女が幽霊なのに、死ぬ、という言葉も間違っていないような気がするのだ。だけど、どれもが近いだけで答えとは違うと思った。

これらのことに横のつながりはなく、ただ、一つの答えへと集束しているような気がする。

なら、その答え、というのは？

死んで、何かを失って、独りになってしまう……。

全てをつなげてみると、とても悲しく辛く寂しいものになった。こんな不安は確かにあるだけで恐怖を感じると思う。

だけど、これだけじゃまだまだ曖昧だ。恐怖を感じる、ということとはわかるけど何に、というのがいまだにわからない。

うーん、と今までこんなに悩んだことがあっただろうか、と思うくらいに悩む。

そういえば、彼女は僕が「やつと、優希ちゃんの目的地に行けるんだね」、と言ったとき、彼女はどこか翳を帯びた声で頷いていた。もしかして、目的が達成される、そのことに不安があるのだろうか。でも、いったいなんだってそんなことに不安を感じ恐怖する必要がある？

死ぬこと、何かを失うこと、独りになってしまふこと、そして、目的を達成すること。

答えを導くのに必要だと思われるピースが増える。だけど、それでもわかりそうにはなかった。

体を動かして壁を見る。そのおかげ、というわけではないけど、僕の頭にはある一つの可能性が思い浮かんでいた。

だけど、それは受け入れがたかった。そして、受け入れがたいからこそ真実なのだと思うせられてしまふ。

それほどまでに僕が気がついたものは衝撃的だった。

あんまり考えていて気持ちのいいものじゃないな、と今さらながらに思い、思考を止めた。それから、ぼーっ、と壁を眺める。

まだこの家は新築だから壁が綺麗だ。ほとんど汚れていない。

だけど、それも今だけでこれから少しずつ汚れていつてしまふんだと思う。いい意味でも悪い意味でも。

それは人間だって同じことなんだと思う。いつまでも人は純粹ではいられない。いつかは汚れていく。

だけど、それだけじゃない。綺麗なまま残るところもあるし、思いつくか経験で最初以上に綺麗になることもある。

幽霊にはそういうことはあるんだろうか。

そう思って、優希ちゃんを思い浮かべる。いや、思い浮かべるものないか、と僕は苦笑してしまふ。

彼女にはちゃんとした感情がある。むしろ、僕よりも感情を表に出すのが上手かもしれない。

彼女は肉体がなく、僕や夕佳みたいな特別な人としか関われないという状態ではあるけど、人間となら変わりはしない。

……そんなことを考えて僕は何をしたいんだろうか。彼女が人間と変わらないということは初めて出会ったときに少し話をしただけでわかってのことだった。

今、僕は意味のないことをした。わかりきっていることを確認するような。そして、何かに、怯えるような……。

僕が怯える？それはなんにかんしてだろうか。

……いや、本当は気づいてる。さっき僕が気づきかけたこと、その答えに僕は怯えている。

もう、寝よう。このまま起きていて考え事をしていたら精神的に疲れそうだ。

そう思い、何かから逃げるように目を閉じる。

本当は逃げられないんじゃないんだろうか、と思いながら。

十八話

山の坂道を上っていく。隣には優希ちゃんがいる。

ここは、どこだろうか、と思つて辺りを見回してみる。だけど、僕達が進む先以外はぼんやりとしていてどうなっているのか、というのがわからなかった。

それなら、どうして、ここが山の坂道だと僕はわかったんだろうか。

考えようとして、すぐに、どうでもよくなった。何故だか、いきなり考える気がなくなったのだ。

僕たちは足を止めずに何も喋ることなく坂を上っていく。いや、よく見てみると、優希ちゃんの口は動いている。だけど、声は聞こえてこない。僕は一言も喋っていないはずなのに楽しそうだった。

でも、そうじゃなかった。僕が気が付いていなかっただけで、僕自身の口も動いていた。そして、同様に声は出ていなかった。

僕は奇妙な感覚に捕らわれていた。だけど、それもさつきと同様に霧散してしまう。そう考えることをこの世界が拒むかのように。

と、不意に強い光が差し込んできた。僕は目を開けていられなくなり視界が真っ白に染まる。

それから、ゆっくりと光が収まってゆく。やがて、目を開けることが出来るくらいの明るさとなった。僕はゆっくりと目を開けた。

そして、視界に入ってきたのは開けた土地と、大きな木、そして、ぼんやり広がる景色だった。

優希ちゃんはいつの間にか木の下にいた。僕が目をつむっている間にあそこまで行ったんだろうか。

優希ちゃんは口を動かしているわけでも、体のどこかを動かしているわけでもない。それなのに彼女に呼ばれているような気がして木の下へと向かっていく。

たったった、と足音が思っている以上に響いた。この世界は不自

然だ。そう思ったのに、またすぐにそういった考えは霧散してしまう。

ほとんど頭の中が空っぽとなった状態で優希ちゃんの方へと近づいていく。

そして、優希ちゃんの前に立つ。そうして、向かい合うような形になる。

何故だか、優希ちゃんは恥ずかしそうに顔を俯かせていた。

ざわああ、と木が風に揺られる音が不自然に耳で響く。けど、それ以外は静寂だった。

優希ちゃんが顔をあげる。その顔は赤く染まっていて、それでいてなんだか強い意志が込められていてどきつ、とさせられた。

そして、ここにきて初めて声を聞いた。

『広也』

それは僕の名前を呼ぶものだった。どこか曖昧なけど、真剣な響きを持っていた。

『私ね——』

強い風が優希ちゃんの髪を撫でる。そして、次に聞こえてきた声は、

「広也のことが大好き、なんだ」

とても鮮明だった。

僕は優希ちゃんの声ではなくその内容に驚いてしまった。

優希ちゃんが、僕のことを好き？それに対して僕はなんと答えればいいんだろう。

なんでもいいから、言おうと思い、口を開こうとする。だけど、その直前に突然、視界が真っ黒になり——

——僕は見慣れた自分の部屋にいた。

いきなりのことで僕は混乱してしまっている。だから、さっきの

が夢だと気がつくのに少し時間がかかってしまった。

それにしても、さっきの夢はいつたいなんだったんだろうか。

優希ちゃんと山道を上って、大きな木のある場所につき、そこで

——優希ちゃんに、大好き、なんだ、と言われた。

そこまで思い出した途端に、僕の顔が一気に火照ったのがわかった。なんだか心が落ち着かなくなってくる。

とりあえず、少し気持ちを落ち着けるために水を飲んでこよう、
と思い上体を起こす。

「あれ？広也、もう起きたの？」

ベッドから足を降ろそうとした時に、優希ちゃんの声が聞こえてきた。

声がしたのは窓の方だった。僕はそちらに顔を向ける。

「広也、顔がなんだか赤いよ？……熱でもあるの？」

優希ちゃんが顔を近づけてくる。僕は、先ほど見た夢を意識してしまいまともに優希ちゃんの顔を見ることができない。

「だ、大丈夫だよ。ちよつと、喉が渴いたから、水飲んでくるね！」

「え？う、うん」

僕はベッドから降り、戸惑ったような優希ちゃんの声を背中に聞きながら逃げるように部屋から出て行った。

台所でコップを取り、そこへと、水道の水を入れていく。水がコップへと注がれる音がなんだか僕の心を落ち着かせてくれる。

と、少しぼーっとしていたらコップから水が溢れ出していた。慌てて蛇口を閉める。

その程度のことに心を乱されながらも、コップの水を口に含む。それほど冷たくはなかったけど、少し僕の心を落ち着かせてくれた。

それにしても僕はなんだってあんな夢を見てしまったんだろうか。僕が見た夢、というならそこで働いているのは僕の感情と記憶だけだ。

そこに他人の感情や記憶が関与しているとは思えない。それなら、僕があんな夢を見た、ということは、僕が優希ちゃんのことを好きだっということだろうか……。

そう思った途端にまた、顔が火照り、気持ちが落ち着かなくなってきた。少しだけ心臓の鼓動が速くなっているような気さえもする。気持ちを落ち着かせるようにもう一度、コップに水を注ぎそれを飲む。今度はその程度では落ち着くことは出来なかった。

どうして、とは思わなかった。ああ、僕は優希ちゃんのが好きなんだな、と気が付いてしまったから。

でも、いつの間に好きになってしまったんだろうか。出会ったときからのような気もするし、出会ってから少しずつ好きになっていったそんな気もする。

まあ、そんなことどうでもいいか。そんなことを知ったところで何かが変わるわけではないだろうから。

それよりも、優希ちゃん自身はどう思っているんだろうか。これまでの優希ちゃんの様子からして嫌い、だということはないと思う。だけど、それ以上はわからない。

そういえば、優希ちゃんは僕にどう思われているのか、ということを知りてきた。あの時、僕はどちらかというと好き、という曖昧な答えを返していた。

あの時に、僕が自分の気持ちに気付いていて、その上で、はっきりと好きだ、と答えていたら優希ちゃんはどう、答えていたんだろうか。

気になる。けど、気にしてもわかるわけではない。こういうのを後悔先に立たず、という。

はあ、なんであの時に気がついてなかったんだろうか。今さらだけど、こんな大事な気持ちに気が付けなかった自分自身に嫌気がさ

してきた。

「ねえ、広也、なんでため息なんかついてるの？」

「うわっ！」

驚いて声の方を向き、後ずさる。そこにいたのは優希ちゃんだった。

「ゆ、優希ちゃんっ？」

先ほどまで好きだとかそういうことを考えていた相手がそこにいた驚きは僕が思っていた以上だった。優希ちゃんの名前を呼ぶ僕の声は裏返っていた。

「広也、驚きすぎだよ」

怒ったように優希ちゃんと言う。

僕が優希ちゃんのことを好きだと気がついたからだろうか、なんだか、その怒った顔が可愛いと思ってしまった。そして、それと同時に、彼女の顔を見るのが恥ずかしくなった。

「あれ？広也、やっぱり、顔、赤くなってるよ。熱があるんじゃないの？」

そう言って、優希ちゃんが僕の方へと顔を寄せてきた。

「い、いや、だ、大丈夫だよ」

顔をそらして、たじたじになりながら答える。優希ちゃんのことを考えていたからそうなっている、とは答えられない。

このときに僕は気がついた。あのとき、もしも僕が自分の気持ちに気付いていてもこんなふうになっていて正直に言えてなかっただろうな、ということに。

「ほんとう？」

僕がそう考えている間にいつの間にか優希ちゃんの柔らかい右手が僕の額に触れていた。それも、左手で頬に触れて僕の顔を優希ちゃん自身の方へと向かせながら。

「うーん、熱はないみたいだから、大丈夫、かな？」

少し安心したような声だった。そんなに、僕のことを心配してくれていたんだろうか。

いや、そんなことよりも、この状態をどうにかしないと緊張でどうにかなくなってしまいそうだった。

「あ、あのさ、優希ちゃんって温度って、わかるの？」
とっさに思い浮かんだことを聞いてみた。

「うん、わかるよ。……特に広也の体温は特によくわかるんだよ」
僕の額に手を当てて僕の瞳を真つすぐに見たまま微笑んだ。僕は
その表情に目を奪われてしまう。

「……って、へ、変な意味じゃないからね！」
いきなり僕の額から手を離してそっぽを向く。

「あ、う、うん、わかってるよ」

本当は優希ちゃんの言った、変な意味、というのがどういう意味かはわからなかったけど、優希ちゃんが手を離してくれたことにほつ、としてそう頷いていた。

「……」

「……」

そのあとは、お互いに何も言わなくなってしまう。優希ちゃんと二人きりでいる時によくあった妙な雰囲気がある。

「あ、あのさ、部屋に、戻らない？」

この場の雰囲気に耐えきれなくなったのか優希ちゃんは振り向きながらそう言ってきた。

「う、うん、そうだね」

僕自身もこれ以上この雰囲気にいるのは限界だったので優希ちゃんがそう言ってくれたのはありがたかった。

十九話

部屋に戻ると僕はすぐに優希ちゃんに、おやすみ、と言ってベッドの上に横になった。

だけど、睡魔が襲ってくることはなかった。あんな夢を見たから起きてしまったんだと思ってたけど理由はそれだけじゃなかったみたいだ。

今日の昼、いや、さっき時間を確認したら午前二時だったから昨日の昼になるのか。まあ、どっちでもいいか。

とりあえず、昼間に寝すぎたせいで眠くないようだ。

それでも、どうにか眠ってみようと目をつむってみる。それから落ち着く体勢はないかと何度も体をベッドの上で動かしてみる。

けど、どう頑張っても眠ることは出来なかった。

「どうしたの？眠れないの？」

頭上から声が聞こえてきた。目を開けてみると、優希ちゃんが僕の顔を覗き込んできていた。

「うん、昼間に寝すぎたせいだと思うけど」

優希ちゃんの声に答えながら僕はゆっくりと上体を起こす。

「そうなんだ。実はわたしも、なんだよね」

あはは、と笑いながら言った。それから、ベッドへと腰かけるようにする。それが生身の人間らしい振る舞いだったのか優希ちゃんが腰かけた部分が沈む。

「優希ちゃんもなんだ。じゃあさ、二人で何か話してようか。二人が眠くなるまで、さ」

「うん、別にいいけど、何か話すようなこと、あるの？」

首を傾げながら聞き返されてしまった。確かにそうだ、特に話すことなんてないように思う。

「……なんだかさ、こうしてるとき、優希ちゃんが僕のことを看病してくれてるみたいだね」

自分たちの状況を見て思ったまを言ってみた。

「あはは、確かにそうだね。広也は何の病気で看病されてるの？」

「うーん、ちよつと熱があつて、咳が出るくらいの風邪かな？」

わざとらしく、咳をしながら答える。

「そっか、風邪か。じゃあ、風邪をひいちゃった、広也はわたしに何をしてほしいのかな？」

「別に何もせずに一緒にいてくれるだけでいいよ。……でも、そうしたら、優希ちゃんに風邪をうつしちゃうか。だったら、この部屋から出ていってほしいかな」

幽霊だから風邪なんてひかないよね、という無粋なことは言わない。

「へえー、そうやって、心配してくれるんだ」

優希ちゃんの顔には嬉しそうな笑みが浮かんでいた。その表情に僕は見惚れてしまう。

「それでも、わたしは、広也の看病を続けるよ。放って帰ったら広也が可哀想だからね。それに、もし、広也にうつされたら、今度は広也に看病してもらうからいいよ。広也なら来てくれるよね」

「うん、そうだね。たぶん、優希ちゃんが風邪をひいた、ってことを知った瞬間に駆けつけるよ」

「学校がある日なら、学校を休んでも？」

じつと、僕のことを見つめて聞いてくる。

「うーん、どうだろう。容態による、かな？ひどい風邪なら、すぐに行くと思うよ。でも、軽い風邪なら学校を休んだりはしないかな？……でも、学校で優希ちゃんのことを心配になつてずっと、そのことばかり考えてそうだな。……たぶん、その時は学校が終わつてすぐに駆けつけていくんだと思うよ」

仮定の話であるはずなのに、僕は真剣に考えて、真剣に答えてた。好きになると、こんなどうでもいいことも本気で考えるようになってしまふのだろうか。

「え？そ、そうなんだ。えへへへ」

なんだか、とても嬉しそうに笑っている。いや、どっちかという
と、にやけている、感じた。なんだか見ているこちらが恥ずかしく
なってくる。

「あ、あの、優希、ちゃん？」

恥ずかしさに耐えきれなくなり、声をかけてしまう。

「え？あつと、えつと、いや、あの、その〜」

その途端に、意味のない言葉ばかりを口にしながらわたたと、と
両腕を振る。

「だ、大丈夫？」

優希ちゃんの少し不審な言動が心配になってそう言った。

「う、うん、大丈夫。……じゃな〜い！広也のバカ！バカ！」

悪口とともに何度も僕のことを叩いてくる。

「ちよ、ちよつと、優希ちゃん、痛いよ」

「いいの！それで！広也が悪いんだから！」

不条理にも僕が悪いことにされてる。しかも、まだ僕のことを叩
き続けている。

「ゆ、優希ちゃん、自分がかかなり不条理なこと言ってるの気が付い
てる？」

「そ、そんなことないよ！わたしは正しいことしか言ってるじゃないよ！」

「じゃあさ。僕の何が悪いのか、ってことを教えてよ」

何回も不条理なことを言われていれば一度くらいは切り返してみ
たくなる。

「う、うるさい！広也は黙って自分が悪かったんだって、納得して
ればいいんだよ！」

せっかく切り返したのに、また不条理が返ってきた。今はどう頑
張っても不条理な言葉しか返ってこないみたいだ。

まあ、でも、顔を赤くしている優希ちゃんを見ると、それで
もいいか、と思えてしまう。

たぶん、僕ににやけた顔を見られたのが恥ずかしいんだろうな、
と思う。それと同時に、可愛いな、とも思った。

なんで、あの時にやけてたのか、というのはわからないけど、
恥じ隠して怒ってるのが子供っぽい、って思った。

「広也、なんで笑ってるの！」

知らないうちに僕は笑みを浮かべてしまっていたようだった。

「ごめん、優希ちゃん。優希ちゃんの反応が子供っぽくて可愛いな、って思ってたね」

つい、本音が出てしまった。

「な、な、なに、言ってるの！わ、わたしは、そんなこと言われても嬉しくなんかないよ！」

顔を真っ赤にして動転している。僕自身もあんなことを言っ
て恥ずかしかったけど、優希ちゃんも恥ずかしかったようだ。

「あ！広也、また笑ってる！」

そうやって、騒がしく夜は過ぎていく……。

二十話

ミーン、ミーン、ミーン……。

蝉の騒がしい鳴き声が聞こえてきた。それと同時に眩しさも感じた。

もう、朝か、そう思って目を開ける。

夜遅く、というか、朝になる直前くらいまで優希ちゃんとの芝居のような普段じゃやらないようなやり取りをしていた。それから眠ったので、いつも起きる時間よりも遅いのは明らかだった。

今、何時だろう、と枕元に置いてある時計を見してみる。

時計は、今の時間が八時半だと告げていた。母さんはもうすでに仕事に行ってしまったている時間だ。

開けっ放しにしていたはずの扉が閉まっていたので一度、僕のことを起こしに来てくれたんだと思う。どうやら、僕は結構、ぐっすりと眠っていたようだ。

優希ちゃんは何？、と思って少し首を動かしてみるとすぐに見つかった。ベッドの横に浮かんで、すやすやと気持ち良さそうに眠っていた。

起こすのは悪いかな、と思い、僕は静かにベッドから出た。先に朝ごはんを食べて来るためにだ。

静かに、足音を立てないように床に足をつける。それから、ゆっくり、ゆっくりと部屋から出て行った。

いつもは廃校に行くために曲がるところを素通りして僕たちはさらに山の上を目指していく。

今日は、優希ちゃんの両親の思い出の場所に行く日だ。夕佳に電話を試みたけど、今日も用事があった来れないようだった。

優希ちゃんは僕の前にいることが多いけど今日は並んでいた。で

も、だからといって何か違和感があるとかそういうことはない。ただ、単純に僕がこうして並んで歩けることが嬉しいからなんだろうけど。

一晩、優希ちゃんと話をしたおかげか優希ちゃんのが好きだ、という気持ちを意識しながらも普通に振る舞うことができるようになった。

「今日は晴れてくれてよかったね。優希ちゃんが望んだのはこんな天気なんだよね」

「うん、そうだよ。これくらい晴れてたら綺麗に見えると思うんだ」
そう言って優希ちゃんは見上げた。僕もつられて上を見る。

頭上に広がっていたのは眩しいくらいの青空だった。雲ひとつ見えない。夕日になると次の日が晴れるというのは本当なんだな、と再確認させられる。

「……ねえ、広也はさ、不安になってたりしない？わたしは、ちょっと、不安、なんだ」

突然の問いと心情の暴露。僕はそれに驚いてしまう。突然そんなことを聞かれたから、ではない。僕も漠然とだけ不安を抱えていたからだ。

彼女が昨日の夜、僕に不安だ、と言ってから僕も抱えるようになった不安。その不安の正体はわかっていような気がするけど目を合わせたくない。

「……って、わたしは何、言ってるんだろうね。お父さんとお母さんの思い出の場所に行けるのに不安だなんておかしいよね」

不自然に笑い、何かを誤魔化すように言った。

「うん、そうだよ。いろんなことを思い出す前だったらともかく、今は不安を感じる必要なんてないよ」

僕も自分自身の不安を隠すようにそう答えていた。

一時間ほど歩いて、開けた場所についた。

その中央には大きな木があった。そして、木の後ろには僕の住んでいる町が景色として広がっていた。

ここには初めて来たはずなのに一度来たことがあるような、そんな気がする。

「……ここが、お父さんとお母さんの思い出の場所、なんだ」

優希ちゃんが呟くように言った。なんだか、嬉しそうだとは感じさせられないような声だった。どうしたんだろうか。

「ねえ、広也はさ、この場所にある伝説があるって知ってる？」

「ううん、知らないよ」

優希ちゃんの方を向いて答える。優希ちゃん表情は悲しそうに見えた。

「そっか。そうだね。広也こっちには引越してきたばかりだ、って言ってたもんね」

何かに納得したようにうんうん、と頷く。

「ここで、二人が強く同じことを願ったらその願い事が叶うらしいよ」

教えたいから教えている、というよりは、何かの訪れを遅れさせたいために話しているような感じだ。

「ここで子どもの頃にお父さんとお母さんはずっと一緒にいようって誓ったんだって。だからね、二人は一緒に死んじやったのかな、って思ってるんだ。……死ぬときまで一緒じゃなくなたって、いいのに、ね」

優希ちゃんは笑顔を浮かべていた。だけど、声は揺れていて、目元には何か光るものが浮かんでいた。

「お父さん、と、お母さん、が死んじやったから、わたし、は寂しかったん、だよ……。寂しすぎて、お葬式が終わった、次の日に、お母さんのハンカチと、お父さんのライターを、持って家から、飛び出しちゃったんだ」

言いながら彼女はポケットの中からハンカチとライターを取り出す。それは昨日見せてもらった、優希ちゃんの両親の形見、だ。

「なんだか、よくわかんないけど、ね。わたし、この二つのものを、ここに、持ってこなくちゃ、って思ったんだ。なんだか、ここに呼ばれているような、気がしたんだ」

そう言って、彼女は中央の木へと近づいていく。

僕は彼女をそちらへと行かせてはいけない、と思っていた。別に悪いことが起こるわけではない。僕個人が望まないことが起こるんじゃないだろうか、という予感だけがある。

そんな、曖昧な予感だったから僕が出来たのは優希ちゃんの方へと手を伸ばすことだけだった。

「お父さんもお母さんも子供のころから本当にお互いのことが好きだったんだろうね。信憑性のない伝説なんかを信じてこんなところに来ちゃってさ」

彼女は木の表面を優しく、撫でる。

「……ねえ、広也。今までわたしのわがままに付き合ってくれて、ありがとう」

少し悲しさを帯びた声音で告げられる言葉。

「なに、言ってるの？それじゃあ、まるで——」

——お別れの言葉みたいじゃないか。

そう思った。だけど、口からその言葉を言うことは出来なかった。怖いから、口に出してしまったら現実のものとなってしまうんじゃないだろうか、と怯えてしまっているから。だから、言えなかった。

「広也に出会ってからは楽しかったよ。幽霊になってから一度も人と関わってなかったから。それに、わたしは……」

そこで、彼女は頭を振って言葉を止める。

「ううん、やっぱり、いいや」

そう言って、彼女はその場にしゃがみ込みハンカチとライターを木の根元に置いた。

そして、僕と顔が真っすぐに合うように浮かび上がり、

「とにかく、広也、今までほんとに、ありがとう」

綺麗な、見惚れてしまうほど綺麗な笑顔を浮かべた。そして、
くような小さな声で言った。

「さよなら、広也——」

その言葉の直後、彼女の体が薄れ始めた。

「優希ちゃんっ！」

僕はその光景に驚き、彼女のもとへと駆け寄る。そして、無意識
のうちに彼女のことを抱きしめていた。

彼女の姿は薄れているけど、まだ、こうして抱きしめることは出
来た。それだけのことなのに、少しだけ安心をしてしまう。

たぶん、これから僕たちは永遠の別れを告げてしまうんだと思う。
優希ちゃんの成仏、という形で。

なんとなく、こうなるとは予想していた。彼女が目的を達成した
そのとき、消えてしまうんじゃないだろうか、って。

「ひろ、や……？」

驚いたような、呆然としたようなそんな声が聞こえてきた。

「なんでそうやって、一方的にいなくなるうとするの？」

彼女を抱きしめたまま聞く。

「だって、辛いから、悲しいから、こうしないと、わたしは自分の
目的が達成できない、と思ったから……」

「そう、なんだ。……でも、どうせなら、もっと話をしてからの方
がよかったな、って思ってるんだけど」

「それは、わたしだって、そうだよ。広也ともっと話をしていたか
ったよ。どうせなら、ずっと、ずっと、話をしていたかった……」

悲しそうな声で言う。彼女の思いは僕の思いと同じだった。悲し
くなるくらい、同じだった。

「でも、広也は生きててわたしは死んでて相容れない存在なんだよ。
だから、別れが来るのは早いんだよ」

「僕たち、もっと別の形で出会えていればよかったのかな？」

「うん、そうすれば、ずっとじゃないけど、もっともっと長い間一緒にいられたかもしれないね」

もう、僕たちはこのまま別れない、ということは考えていない。考えることが無意味だとわかっていているから。

だけど、僕には伝えたい想いがある。この想いは別れてしまえば意味のないものだけど、それでも、伝えたい、という想いがある。

「優希ちゃん、僕はね、別れる前に、言いたいことがあるんだ」

僕はそう言いながら抱き締めるのをやめて彼女の肩を掴んで見つめあうような形になる。

「なに？」

なにかを、怖がるように僕の瞳をじっと見ている。

「僕はね——」

ここで、一度深呼吸をする。そして、僕はゆっくりと口を開く。

「——優希ちゃんのことが好きなんだ」

僕は、そうして、想いを伝えた。

これだけは、伝えたい、とそう思っていた想いを。

二十一話

「……うくっ……ひっく……」

「え？ゆ、優希ちゃん、ど、どうしたのっ！僕なんかに、そういうこと言われるの、嫌だった？」

優希ちゃんが泣いていたことに驚いて彼女から手を離して、距離を置いてしまう。

「そういう、わけじゃ、ないよ、バカ……」

泣きながら罵られた。

だけど、そんなことよりも、彼女から離れてみてわかった。彼女の体は結構薄れてきていて、もう別れが近い、ということを物語っていた。

「つて、うわっ！」

いきなり、抱きつかれた。倒れることはなかったけど、どうしていいのかわからなくなってしまふ。

「わたしも……わたしだって広也のことが好きだよ。大好きなんだよ！」

叫ぶように言って、また、泣き始める。

「だから、だから、ね。わたしは、広也と別れの、言葉を、言う時間が、ほしくなかったんだよ……。広也と、別れるのが、辛くて、悲しくて、痛くて、耐えられなくて……。そんなんだから、もし、別れの、言葉、なんて、言ったら、泣き出しちゃう、って思ったから、言えなかったんだ、よぉ……」

「そうだったんだ……。僕もね、こうして、優希ちゃんが目的を達成したら、いなくなっちゃうんじゃないか、って不安だったんだ」

僕はもう一度、優希ちゃんを抱きしめる。最初に抱きしめた時よりも、感触があやふやになっているような気がする。だから、最初よりも力を入れて抱きしめる。

「結局、その不安は、的中しちゃった、けどね」

今まで隠して目をそらしていた不安。それが現実となった今はそれから目をそらす意味もない。悲しいけど、これが現実だから。

「広也も、不安だったんだ。……あは、よかった」

優希ちゃんが小さく笑う。だけど、それが悲しさで揺れていたのは明白だった。

「でも、広也、って、ほんとに、バカだよ。幽霊の、わたしなんかを、好きに、なって、さ」

「そういうことに、なっちゃうのかな。でもね——」

僕は優希ちゃんの顔を見るために彼女を抱くのを止める。彼女は依然として僕に抱きついたままだからあまり距離は開かないけど、それでも、彼女の顔を見ることは出来た。

「——好きになっちゃたら、それはもう、しょうがないことだと思っただ。もう、生きてるだとか、死んでるだとかそんなことが関係なくなるくらいにね」

僕の前にある優希ちゃんの顔は涙で濡れていた。だけど、同時に笑顔も浮かんだ。

「広也のくせに、なに、かつこつけたようなこと言ってるの？」

「あ、あれ？ 気に入らなかった、かな？」

その言葉に彼女は首を横に振ってくれる。

「うつん、そんなことないよ。むしろ、すごく、嬉しいかな」

恥ずかしそうに目をそらしながら言う。僕はそんな優希ちゃんが可愛いと思っただし、愛おしいとも思っただ。これから、永遠の別れが来るとわかっていても。いや、永遠の別れが来るとわかっていただけこそ余計に。

「……広也、わたしは、嬉しいんだよ。広也に出会えて、少しの間だけど広也と一緒にいられて、……広也に、好きだ、って言うてもらえて……」

「僕も、そうだよ。優希ちゃんに会えて、よかった。優希ちゃんと一緒にいられて、よかった。優希ちゃんを、好きになれて、よかった……」

彼女が言ったことを復唱するように言う。彼女を安心させようとか、そんな単純な気持ちからじゃない。心の底から、僕はそう思っていた。そして、そうだからこそ、僕は今にも泣き出してしまいうだった。

「でも、広也。もう、わたしたちは、もう……お別れ、だよ」

そう言う彼女の姿は今にも消えてしまいそうだった。

「そう……だね……」

もう、ダメだった。溢れてくる涙を抑え切れなくなる。

「ねえ、ひろ、や。泣かない、でよ。わたしも、そんな、広也を、見てたら、泣きたく、なっちゃう、から、さ……」

「……うん、ごめん。これで、最後なんだから、笑って、いようか」「うん、そう、だよ。それで、いいん、だよ……」

そういつて、彼女は笑顔を、浮かべた。瞳からは幾筋もの涙が流れているようなボロボロの笑顔を。

たぶん、僕も同じような笑顔を浮かべているんだと思う。笑顔を浮かべても、その隙間から悲しさが溢れてしまっているから。

「ねえ、ひろ、や、最後に、わたしのこと、抱き締めて、くれないかな。今までで、一番、強く、さ」

「うん、わか、った」

僕は彼女が望んだとおりにぎゅっ、と力を込めて抱きしめた。離れたくない、放したくない、その一心で抱きしめる。

彼女もまた同じように痛いほどに抱きついてくる。だから、僕は更に力を込めて抱きしめる。

彼女の温もりを強く、感じる。だけど、それは徐々に消えていく。

「広也……」

涙で濡れた声で僕の名前を呟く。

「楽しかった、よ……。嬉しかった、よ……。いろんなことを感じたよ……。広也の、おかげで」

彼女の涙で、僕の服が濡らされていく。

「お別れは、辛い、けど……。さようなら、広也」

彼女には見えないとわかっていても、僕は無理やり、笑顔を浮かべた。彼女も、笑顔を浮かべているだろう、と思ったから。

「うん、さようなら、優希ちゃん」

その直後に彼女は消えてしまった。感触も、温もりも、彼女の涙も。

そして、全てを理解した途端、僕の胸の中にどうしようもない、悲しさが、苦しさが、寂しさが……そして、恋しさが浮かんできた。僕はその場で立ち尽くしたまま、嗚咽を漏らす。その間に、何滴もの雫が地面へと落ち斑模様を作った。

胸が締め付けられるくらいに痛かった。それが、彼女は僕にとって、本当に大切な存在なんだと再確認させられた。

涙が溢れて止まらない。抑えていなければ、子供のように大声をあげて泣き出してしまっそうだ。

そして、それを無理に抑えているから胸が痛い。どうしようもないくらいに苦しい。

喪失感が僕を襲う。それが僕の心の中でのたうちまわる。

「広也、やっぱり、お別れは、辛い、よお……」

突然、優希ちゃんのそんな泣き声が聞こえてきた。

まだ、彼女はここにいる。そうだ、僕に泣いている暇なんてない。彼女のことが本当に大切なら、彼女を泣き止ませなければいけない。

僕は、手で自らの涙を拭い去る。そして、彼女を泣き止まず言葉を考える。

「優希ちゃん！」

「え……？」

彼女の名を呼ぶと、驚いたようなそんな声が聞こえてきた。

「優希ちゃん、僕は君の笑ってる顔が好きなんだ！」

普通の声では届かないと思ったから大きな声を僕は張り上げて言う。

「だから、泣かないで、笑っていて！そうしたら、僕も、笑って、いられるから……！」

やっぱり、駄目だ。こうして、いても、泣き出してしまいそうになる。声が少しずつ歪んでくる。

『広也……』

彼女が呟くように、名前を呼んだ。涙で歪んだようなそんな声、だった。

僕たちの間に沈黙が流れる。

彼女は消えてしまったんだろうか、という不安はなかった。温かさを、彼女の温もりを感じる事が出来たから。

『うんっ……！そう、だよねっ。広也は全然っ、ダメな人だからっ、わたしが笑ってあげないといけないんだよねっ！』

涙を、無理やり振り払うような元気な声が聞こえてきた。

『広也、約束だよっ！わたしが、消えても泣いちゃ、ダメだからねっ！』

『うん、約束、だね。そのかわり、優希ちゃんも、絶対に泣いたら駄目だよ！』

答えは、返ってこなかった。だけど、その代りに、一瞬、彼女の笑顔が見えたような気がした。涙のない、彼女の純粋な、笑顔が。

僕は、ゆつくりと、目元にたまっていた涙を拭う。これは、優希ちゃんと約束をする前に浮かべていた涙だ。だから、まだ、約束は破ってない。

だけど、今すぐにも涙が溢れてきそうだった。声をあげて泣き出してしまいそうだった。

僕はそれを抑えるように、笑顔を浮かべる。それから、草の上へと横になり青い空を見上げる。

「優希ちゃん、空が、青いよ」

もう、近くに彼女はいないのにそう語りかける。

「雲ひとつ浮かんでないし、風も気持ちがいいよ」

どうでもいいようなことを僕は一人、喋りつづける。そうしないと、今すぐにも泣き出してしまいそうだったから。

「優希ちゃん、僕は君ともっと話していたかったよ。ずっと、一緒

にいたいと思つてたよ」

もう、叶わない願いを口にする。それは、とても悲しい行為だけれど、他に、どうすればいいのかわからなかった。

ざわざわ、と彼女の両親の思い出の場所の木が葉を揺らす音が聞こえてくる。騒がしくはない、むしろ、心地よかった。

風が優しく、僕を包み込んでいるような気がした。

彼女のいなくなった世界は少し悲しさに彩られているような気がした。

そして、風が、それを悲しさとは別の色に塗り替えてようとしているとも……。

二十二話

気持ちが悪く着くまで僕は延々と優希ちゃんへと対する独り言を言い続けていた。

そして、気持ちが落ち着いた今では空をぼーっ、と眺めていた。

「広也、元気出して、しゃきつ、としなさいよ？そんなんじゃ、優希ちゃんに心配されるわよ」

不意に誰かに声をかけられた。その声は聞き覚えのある声だった。別に、元気がないわけじゃないよ。たまにはこうやって空を眺めてみるのも悪くないかなあ、なんて思ってたね」

「落ち込んで、そうやってる、ってわけじゃないのね。それなら、よかったわ」

声の主が少し嬉しそうに笑う。

「……それよりもさ。夕佳は今日も用事があるんじゃないの？」
僕はそう言いながら上半身を起こす。いつの間にか隣に夕佳が草の上に座っていたのが見えた。

「ええ、そうよ。今はその用事が終わって帰る途中よ」

「帰る途中って……。どこに行ってたの？」

夕佳は何気なく言っていたけど、帰りにこんなところを通るなんて明らかにおかしい。

「仕事をしてたのよ。……優希ちゃんの魂はちゃんと送り届けてあげたわ」

「え？それって。どういうこと？」

「そのままの意味よ」

そう言われてもどういふことだか理解することができない。その言葉は非現実じみていたから。

「まあ、普通の人にはわかるわけないわよね」

僕の表情から僕が何を考えていたのかわかったのか、そう言った。「私は、魂の案内人。天国に行きたいけど、行けない人たち、現世

でやり残したことをやり終えた人の道案内をしているわ」

「そう、なんだ。……夕佳が案内したってことは優希ちゃんは無事に天国に行けたんだね」

「当たり前よ。……あなたたちの別れを見ているのは辛かったけど、あの子がこの世に残った目的を達成したのならしっかりと、連れていかないといけないもの」

悲しげに、夕佳の瞳が揺れる。でも、それより、少し気になることがあった。

「今、僕たちの別れを見ているのは辛かった、って言ったよね？もしかして、ずっと見てたの？」

「ええ、昨日からずっと見させてもらってたわよ」

「どこから、どうやって？」

少し動揺しているけど、そこまで、はっきりと見られたわけじゃないだろう、と思つて冷静にそう聞いた。

「近くから見てたわよ。私は、幽霊とは違うけど、幽霊みたいな存在だから姿を消すことくらい簡単にできるわよ。しかも、幽霊からも見えないようにね」

悪戯っぽく笑つて言つた。

「二人とも、すごく仲がよさそうだったじゃない。優希ちゃんが広也に好みの女の子のことを聞いた時の二人の沈黙なんかは初々しい感じがして見てるこっちは結構おもしろかったし、夕陽に照らされた部屋の中で優希ちゃんのセリフを取ったりしたのなんか、かなり雰囲気よかったわよ。それに昨日の夜なんて広也の口から、可愛いなんて言葉がでるなんて思いもしなかったわ」

本当に夕佳は近くで僕たちのことを見ていたようだった。というか、家の中まで入ってたなんて。

「あら？広也、少し顔が赤いわよ？」

夕佳が僕の顔を覗き込んできてからかうように言つた。僕は、恥ずかしさから顔をそらす。

「ほらほら、照れない、照れない。お互いに好きだっていうなら、

それを他人に見せびらかせるくらいの気持ちでいないと駄目よ」

そう言った夕佳は微笑を浮かべていた。今さらだけど、つかみどころがないなあ、と思った。次に何を言ったりしたりするのか予想がつきにくい。

「そうだ、夕佳、ひとつ、聞いてもいいかな？」

「いいわよ。私に答えれることならなんでも答えてあげるわよ」

僕がこれから言うことを察したのか、夕佳はさっ、と表情を真面目なものにした。

「あのさ。生まれ変わり、って本当にあるの？」

それを知ってどうなる、とは思わないけど、優希ちゃんがこれかどうかなるのか、ということを知りたいと思った。

「へえ、広也、優希ちゃんと同じこと聞くのね」

「え、そうなんだ？……つと、それよりも、どうなの？」

優希ちゃんが僕と同じことを聞いていた、ということには少し驚いたけど、そこまで動揺するほどのことでもない。もしかしたら、心の隅で、彼女も聞いている、と思っていたのかもしれない。

「結論から言うと、生まれ変わりはあるわよ。そして、言わなくてもわかってると思うけど前世の記憶は何一つとして残らないわ」

それは、予想通りの言葉だった。でも、予想通りだからこそ、予想外のことを言ってほしいと思っていた。

「——でも、どんな場所にも世界にも例外は存在するわ」

それは、予想外の言葉だった。その内容は、僕の望むものなのか、それとも違うのか。それを、いち早く知りたくて夕佳の言おうとする言葉に耳を傾ける。

「記憶の想いが強すぎて消せなかったのか、それとも、単なる事故なのかはわからないけどときどき、前世の記憶が残っていることがあるのよ」

それは、僕の望んでいたものだった。

「そうなんだ。じゃあ、もしかしたら、いつか優希ちゃんの記憶を持った人に会えるかもしれないんだね」

「……言っておくけど、人間に生まれ変わるとは限らないわよ。それに、優希ちゃんが今すぐ人間に生まれ変わったとしても十五歳以上、年が離れてるのよ」

「そんなの、関係ないよ。僕は優希ちゃんと一緒にいらればそれでいいんだ」

そう言つて、僕は空へと向かつて手を伸ばしてみる。

天国、というのがどこにあるのかはわからないけど、なんとなくそちらの方へとあるような気がしたからだ。こうやって、手を伸ばしていれば彼女が僕の手を掴むために手を伸ばして何かの奇跡が起るかもしれない、とそう思いながら。

「なんだかあの子が羨ましいわ。こんなに、想ってくれる人がいて」「そう思うなら探してみればいいんじゃないかな？夕佳のことを想ってくれるような人を」

僕は視線を空から、夕佳の方へと戻してそう言つた。

夕佳は、きよとん、としたような表情を浮かべていた。僕の言つたこと、そんなに意外だったかな？

「やっぱり、広也つて不思議な人ね。私が幽霊みたいなものだ、つて知つててそんなことを言うなんて」

驚きを含んだような声だった。そんな夕佳に対して僕は言う。

「別に、不思議なんかじゃないよ。僕は現に優希ちゃんのことを好きになつたわけだから、同じように夕佳のことを大切に想つてくれるようになる人がいるはずだよ」

「それも、そうね。これから先、あなたみたいな人に会うことがあるかもしれないわね」

夕佳は微笑みを浮かべる。そこに込められた意味はわからなかったけど、悪い意味じゃないんだろう、と思つた。

「それにしても、広也。本当に落ち込んでないのね」

「当たり前だよ。落ち込んでても意味がないからね」

「ふうん、広也、つて結構強いのね」

少し意外そうに言つた。けど、夕佳の言っていることは間違つて

いる。僕は強くなんかない。

「そんなことないよ。優希ちゃんとの約束がなかったら落ち込んでただろうからね」

そうそれは、優希ちゃんとの約束がなければ泣いていたかもしれない、ということだ。僕は約束があるからこそ、こうやって普通に振る舞っていられる。

だけど、夕佳はそうは思っていないようだった。

「それでも、よ。約束があったとしても、強さのない人は泣いてしまうものよ。それでも、広也よりは長生きをしているんな人を見てきたからわかるのよ」

「そうなのかな？」

「そうなのよ。……ていうか、広也はもうちょっと自分のことを誇りなさいよ。強さがあっても、そんなに謙遜してたら意味がないわよ」

夕佳は少し怒っているようだった。僕は普通に振る舞ってるつもりなんだけど、夕佳の目には謙遜ばかりしている人のように見えらしい。

「……わかったよ。それじゃあ、変わってみるよ。自分のことを誇りに思えるようにね。それに、夕佳にこんなこと言われてるところを優希ちゃんに見られたら笑われるだろうしね」

「あら、ちゃんとわかってるじゃない。でも、私は笑われる、笑われない、の問題じゃないと思うわよ」

「うん、そうなんだろうけど、それだと、別に変らなくてもいいかな、って思っちゃうんだよ」

優希ちゃんが絡んでくるから僕は変わろうとすることができる。

それが、駄目だってことはわかってるけど、僕は自分が自分のために変わろうとすることができない人だということもわかってる。

「だから、優希ちゃんのために変わるよ。彼女に笑われないようにするために、彼女が安心していられるように」

そう言って、僕は目を閉じてみた。

『がんばれ、広也』

心の中の優希ちゃんがそう言ったような気がした。僕なんかそんなことを言ったのが面白いのか、それとも、嬉しいからなのかはわからないけど、笑いながらだった。

僕はそんな優希ちゃんに笑い返した。頑張るよ、という意味を込めて。

エピソード

優希ちゃんが天国へと行ってから一年が経った。

僕は今、彼女と別れた大きな木のあるこの場所へと来ている。

あの日から僕は変わったんだろうか、そして、変わったとしてもそれは僕の、優希ちゃんの望む、望んだ変わり方なんだろうか。

自分ではよくわからない。だから、誰かに聞いてみたいと思うんだけど、あの日のことを知っている人はもう僕の近くにはいない。

優希ちゃんは言わずもがな天国へと行ってしまったわけだし、夕佳は一年以上同じ土地にいても魂を案内する仕事はできない、と言って半年前にどこかへ行ってしまった。東の方に行く、というのは聞いたけど、具体的な場所は聞いていない。もしかしたら、夕佳はどこに行くのか決めもせずに移動したのかもしれない。

今、彼女はどこにいるんだろうか。気になってはいるけど、知りようのないことだ。もう、夕佳の携帯電話には繋がらなくなってるし、きつと元気にやってるだろう、って信じられるから最近はまだ気にしないようにしている。

そんなふうに今までのことを考えながら大きな一本の木の木の下へと向かう。

「優希ちゃん、あれから一年が経ったね」

誰に向けるでもなく、喋りかける。誰にも聞かれない言葉たちは虚空へと消えていく。

あの日から僕はこうして一週間に一度のこと、優希ちゃんに出会った廃校へと訪れている。そして、ここに来るたびに僕は誰にもいない虚空——いや、優希ちゃんへと話しかけている。ここなら優希ちゃんへと言葉が届きそうな、そんな気がする。

「三日前に僕が持っていてあげた花は気に入ってくれたかな」

言ってから僕は木の根元に置かれている花瓶とそれに挿されている花を見た。

これは、僕が三日前に持ってきたものだ。花瓶はあの廃校から持ってきた、花は僕の家近くの花屋で買ったものだ。

「何を買ってくればいいのかわかんなくて、無難なものを選んじゃったけど気に入ってくれてるなら嬉しいよ」

きつと、彼女なら喜んで受け取ってくれているだろう、と思って僕は笑った。

「ちょうど一年前の三日前に僕たちは出会ったんだよね」

『うん、そうだね』

一瞬、彼女の頷く姿が見えたような気がした。そして、彼女の声も聞こえた気がした。

こういうことはここに来ればよくあることだった。彼女の幻覚を見たり、幻聴を聞いてしまうほど僕は彼女のことを今でも想っているということなのだと思う。だから、大して気にせずさらに言葉を続ける。

「あのときは、優希ちゃんを好きになるなんて思わなかったし、こんなふうに別れが来るとも思ってたなかった」

いつもよりたくさんの記憶が蘇る。

「優希ちゃんは、いつから僕のことを好きになったの？……僕は、優希ちゃんと別れるその日の深夜に気がついたんだ。優希ちゃんに好き、って言われる夢を見て、それがきっかけになってね」

今まで一度も優希ちゃんに話したことなかったことだった。近くにいないくても彼女には声が届くと思ってるから恥ずかしかったのかもしれない。

けど、今日は特別な日だ。いつもとは違う気分になったからなんの抵抗もなく話すことが出来た。

それから、僕は優希ちゃんに出会ってから、起きた出来事、思ったこと、考えたことなど思いつくかぎりに話していく。

時には笑顔を浮かべながら、時には悲しげな表情を浮かべながら、時には幸せを感じながら……。

そうしていると、いつのまにか時刻は夕方となり、夕陽が世界を

赤色に染めていた。

そろそろ帰ろう、そう思ったときだった。ガサリ、という物音が聞こえてきた。

僕はその物音の正体を確かめるために後ろに振り返ってみた。

そこにいたのは、一匹の黒色の子猫だった。

その子猫は僕の方へとゆっくりと近づいてくる。僕はその子猫を向かい入れるようにしゃがみ込んで子猫が来るのを待つ。

子猫は何の躊躇もなく僕の方へと駆け寄ってきて僕の胸へと飛び込んできた。

そのことには驚いたけどなんとか抱きかかえることが出来た。

どこからきたんだろうか、と思いながら僕は子猫の頭を撫でる。

と、ふと、この子猫から懐かしいものを感じた。これは、もしかして、

「——優希、ちゃん？」

にゃー、とその子猫は可愛い声で鳴いた。それがどういった意味なのかはわからないけど、なんとなく、僕の言葉に頷いているように感じた。

「優希ちゃん、なんだね」

頭を撫でてあげながら僕は確認するように言う。そうしたら、今まで無防備に僕に頭を撫でさせてくれていたのに突然、しゃー、と威嚇をし始めた。うん、この反応は優希ちゃんだ。

「おかえり、優希ちゃん」

にゃー、と鳴いた。そこに笑顔を浮かべて『ただいまっ！』と言う優希ちゃんの姿が浮かんだ。

これは奇跡なのか、それとも運命なのか。どちらにしろ、僕たちは再び出会うことが出来た。

お互いに人間ではないけど、僕はこれで満足だ。彼女もたぶん、同じだと思う。

これから、どうするのか、というのは考えるまでもなくすぐに浮かんだ。優希ちゃんと一緒に住もう、ということが。

彼女は一緒に住むことについてどう思うだろうか。

嫌だと思っただろうか、嬉しいと思っただろうか、それとも、何も思わないんだろうか。

いや、そんなことは考えるまでもないか。彼女は嬉しいと思ってくれるはずだ。彼女は僕のことを好きだと言ってくれて、そのことに偽りはなかったから。

それでも、確認くらいは取っておこう。

「優希ちゃん、僕と一緒に暮らそうか」

優しい風が僕たちを包み込んだ。それと同時に彼女の、にゃー、という鳴き声が小さく聞こえた。

FIN

エピソード（後書き）

これにて、完結、です。

ここまでお付き合いしていただきありがとうございます。

もし、感想や評価などがありましたら、遠慮なく書き込んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6414c/>

道に迷ったその先で・・・

2010年10月8日15時02分発行